丹上遺跡（その7）

観音寺遺跡（その3）

主要地方道 大阪中央環状線 改良工事に伴う発掘調査報告書

1995年3月31日

(財)大阪文化財センター

丹上遺跡（その7）
観音寺遺跡（その3）

主要地方道　大阪中央環状線　改良工事に伴う発掘調査報告書

1995年3月31日

（財）大阪文化財センター

調査地より二上山を望む

調査地全景（右上大塚山古墳）

８Ｅトレンチ全景

３Ｍトレンチ古墳全景

序　　文

観音寺遺跡の命名の由来となった観音寺は、松原市立部1丁目に所在した寺で、小字名にその名を留めている。来歴は不詳ながら、真言宗の寺であったものが、明応年間（1492～1501）に本願寺8世連如に帰依して浄土真宗に改宗し、寺号を栄久寺に改めたとされる。願成山栄久寺は、大阪夏の陣（1615）の戦乱で消失したが、その後再建され、現在も当地に所在する。

丹上遺跡と観音寺遺跡の立地する広大な中位段丘面は、古代より難波と大和を結ぶ主要幹線道路が幾つか通っている。丹上遺跡と観音寺遺跡の境界付近には、古代の官道である丹比道に比定される竹之内街道が通るが、西より直進してきた道路が遺跡地付近で南に屈曲し、さらに東進する。近畿自動車道の丹上遺跡の発掘調査では、この屈曲部の西側で奈良時代から平安時代の整然と配置された掘立柱建物群が検出されており、官衙的な性格が想定されている。北側の観音寺遺跡においても、奈良時代から室町時代にかけての多数の掘立柱建物群を主とする集落跡が検出されており、当地域が幹線道路沿いの枢要な地であった事が分かる。

今回の発掘調査は、近畿自動車道建設後に計画された主要地方道大阪中央環状線美原ロータリー部の立体交差化に先立って実施されたものである。調査対象地が、大阪中央環状線、堺羽曳野線、泉大津美原線（松原泉大津線）という幹線道路が分岐する交差点周辺であり、交通量の多さと作業エリア確保の点で、困難の多い調査であった。そのため、調査可能になった箇所から順次発掘調査を行ってきたが、今回の発掘調査が当該事業における最後のものとなった。

発掘調査の結果、丹上遺跡では小型方形墳が検出され、他にも古墳の存在が推測される遺物が出土している事から、散在的な古墳群が展開している可能性を指摘できた。また、観音寺遺跡では飛鳥時代から室町時代にかけての多数の遺構・遺物が検出され、集落の様相をより精緻に考えられる資料を得た。

これも、ひとえに大阪府教育委員会、大阪府土木部、同富田林土木事務所をはじめとする関係各位のご指導・ご協力の賜物と感謝している。今後とも当センターへのご支援を賜るよう切に希望する。

平成7年3月

財団法人　大阪文化財センター
理事長　坪井　清足

例　　言

1．本書は、主要地方道大阪中央環状線改良工事松原市立部地内の丹上・観音寺遺跡の発掘調査報告書である。

2．本調査は、大阪府教育委員会及び(財)大阪文化財センターが大阪府土木部富田林事務所の委託を受けて実施した。

3．調査期間は1992年10月5日から1993年3月25日であり、現地調査は12月15日から実施した。調査面積は6,070m²である。

4．調査は(財)大阪文化財センター調査課長中西靖人、主幹兼調査第3係長赤木克視の指導の下、第3係主任技師小野久隆（現地調査）、技師立花正治（遺物写真）が担当した。なお調査・整理では主任技師森屋美佐子の協力を得た。

5．調査の実施にあたっては、大阪府土木部富田林事務所、日本道路公団大阪建設局大阪工事事務所の協力を受けるとともに、大阪府教育委員会、松原市教育委員会をはじめとする関係各機関、下記の方々の御指導を賜った。記して感謝の意を表します。

（敬称略）足立俊彦・岡本武司・芝田和也（松原市教育委員会）、玉井　功（大阪府教育委員会）、森村健一（堺市立埋蔵文化財センター）

6．本書の編集は小野が行い、遺物実測・トレースについては調査員上河善子が行った。遺物の観察表・遺物の文章についても上河が作成し、最終的には小野が手を加えた。

7．現地調査にあたっては、以下の調査員・調査補助員の協力を得た。桂　雅之、川辺　稔、久禮孝志、宮川和幸、森口　光、吉田誠治、与那嶺勉

8．本書で用いた方位北は座標北を示す。座標北から東へ0°15′振って真北となる。標高はT.P.(東京湾平均潮位）±を用いた。

9．土層等の土色は小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』(農林省農林水産技術会議事務局監修）を援用した。

目　　次

カラー図版
序文
例言
Ⅰ．調査に至る経過と調査方法…… 1
　1．調査に至る経過…… 1
　2．調査の方法…… 1
Ⅱ．位置と環境…… 3
　1．位置と地形的環境…… 3
　2．歴史的環境…… 3
Ⅲ．層序の概要…… 5
　1．丹上遺跡…… 5
　　（1）2Mトレンチ…… 5
　　（2）3Mトレンチ…… 6
　2．観音寺遺跡…… 9
　　（1）10D・11Dトレンチ…… 9
　　（2）8E・9E・10Eトレンチ…… 9
　　（3）10F・11F・12Fトレンチ…… 10
Ⅳ．丹上遺跡の調査成果…… 13
　1．2Mトレンチ…… 13
　2．3Mトレンチ…… 16
　　（1）1区…… 16
　　（2）2区・3区…… 20
Ⅴ．観音寺遺跡の調査成果…… 33
　1．D地区…… 33
　　（1）10Dトレンチ…… 33
　　（2）11Dトレンチ…… 38
　2．E地区…… 45
　　（1）8Eトレンチ…… 45
　　（2）9Eトレンチ…… 63
　　（3）10Eトレンチ…… 67
　3．F地区…… 71
　　（1）10Fトレンチ…… 71
　　（2）11Fトレンチ…… 98
　　（3）12Fトレンチ…… 105
Ⅵ．出土遺物…… 107
Ⅶ．まとめ…… 123

図　目　次

図１　調査区位置図……1
図２　丹上・観音寺遺跡の周辺遺跡分布図
（１/15000）……4
図３　２Ｍトレンチ土層断面図……5
図４　３Ｍトレンチ１区土層断面図……6
図５　２区土層断面図(左:南壁面、右:西壁面)……7
図６　３区土層断面図(左:南壁面、右:西壁面)……8
図７　10Ｄトレンチ土層断面図……9
図８　11Ｄトレンチ土層断面図……10
図９　８Ｅ・９Ｅトレンチ土層断面図……11
図10　10Ｆ・11Ｆトレンチ土層断面図……12
図11　土坑２断面図……14
図12　２Ｍトレンチ第１面平面図……14
図13　３Ｍトレンチ１区第２・第３面平面図……17
図14　ピット、溝断面図……19
図15　３区溝14遺物出土状況図……24
図16　３区ピット断面図……25
図17　３区土坑、落ち込み、溝断面図……26
図18　２区ピット、井戸、溝断面図……27
図19　３区溝23土層断面図……28
図20　３区土坑、落ち込み、溝断面図……28
図21　３区溝23遺物出土状況図……29
図22　３Ｍトレンチ(２区・３区)第２面平面図…31～32
図23　10Ｄトレンチ第２面平面図……35～36
図24　11Ｄトレンチ第２面平面図……35～36
図25　10Ｄトレンチピット断面図……37
図26　土坑、溝断面図……38
図27　11Ｄトレンチピット、土坑、溝断面図……42
図28　土坑１平面・断面図……43
図29　８Ｅトレンチ第２面平面図……47～48
図30　９Ｅトレンチ第２面平面図……47～48
図31　ピット断面図……49
図32　ピット断面図……49
図33　ピット断面図……50
図34　ピット断面図……51
図35　ピット断面図……51
図36　Ｐ125・126・227・228断面図……52
図37　ピット断面図……53
図38　Ｐ292・57断面図……54
図39　Ｐ58平面・断面図……55
図40　Ｐ69・126・233平面・断面図……55
図41　Ｐ69・79・234断面図……56
図42　Ｐ77平面・断面図……56
図43　井戸１・２・３断面図……59
図44　土坑11断面図……59
図45　土坑６・９・12、溝16断面図……60
図46　溝14・16・18断面図……61
図47　９Ｅトレンチ Ｐ26、溝５・８・13断面図……65
図48　ピット断面図……66
図49　Ｐ25断面図……66
図50　ピット断面図……66
図51　10Ｅトレンチ平面図……67
図52　10Ｅトレンチ土層断面図……68
図53　ピット断面図……70
図54　10Ｆトレンチ第２面平面図……75～76
図55　10Ｆトレンチ第３面平面図……75～76
図56　第２面ピット断面図……80
図57　第２面ピット断面図……81
図58　第２面ピット断面図……82
図59　第２面ピット断面図……82
図60　第２面ピット断面図……83
図61　第２面Ｐ208・337平面・断面図……84
図62　第２面Ｐ425平面・断面図
（左:上層、右:下層遺物出土状況図）…85
図63　第２面Ｐ382平面・断面図……86
図64　第２面溝13、Ｐ106・108・109遺物出土状況図……87
図65　第２面溝33、土坑６・７・19断面図……88
図66　第２面土坑16平面・断面図……89
図67　第２面土坑16遺物出土状況平面・断面図……89
図68　第２面土坑15平面・断面図……90

図69 第２面井戸５、土坑10・12・15断面図……91
図70 第３面ピット断面図……95
図71 第３面ピット断面図……95
図72 第３面土坑20断面図……96
図73 11Ｆトレンチ第２面ピット断面図……97
図74 11Ｆトレンチ第２面ピット断面図……97
図75 11Ｆトレンチ第２面平面図……99
図76 第２面溝10遺物出土状況図 ……101
図77 第２面溝11遺物出土状況図 ……102
図78 第２面溝10・11断面図 ……103
図79 第２面井戸２、土坑１・２断面図 …104
図80 12Ｆトレンチ土層断面図 ……106
図81 ３Ｍトレンチ出土遺物 ……107
図82 10・11Ｄトレンチ出土遺物 ……107
図83 ８Ｅトレンチ溝16出土遺物 ……108
図84 ８Ｅトレンチ溝16、土坑12出土遺物 109
図85 8Ｅトレンチピット、井戸、落ち込み、等出土遺物 …110
図86 ８Ｅトレンチ出土遺物 ……111
図87 10Ｆトレンチ Ｐ425出土遺物……111
図88 10・11Ｆトレンチピット、溝、土坑、等出土遺物…113
図89 Ｍトレンチ溝５平面図・出土遺物 …124
図90 丹上遺跡Ｍ地区遺構略図 ……125
図91 観音寺遺跡Ｄ地区遺構略図 ……126
図92 観音寺遺跡Ｅ地区遺構略図 ……127
図93 観音寺遺跡Ｆ地区遺構略図 ……128

写真図版目次

表紙 観音寺遺跡航空撮影
カラー図版１ 上：調査地より二上山を望む
下：調査地全景(右上大塚山古墳)
カラー図版２ 上：８Ｅトレンチ全景
下：３Ｍトレンチ古墳全景
写真１ 試掘調査状況……２
写真２ 10Ｆトレンチ機械掘削状況……２
写真３ ２Ｍトレンチ調査風景……２
写真４ クレーン車による写真測量風景……２
写真５ ２Ｍトレンチ土層断面(西から)……13
写真６ 北端部土層断面（西から）……13
写真７ ２Ｍトレンチ全景（南から）……13
写真８ 土坑２・４、ピット(南から)……13
写真９ 土坑１土層断面（西から）……15
写真10 土坑２土層断面（南から）……15
写真11 １区第３面北半部全景(東から)……16
写真12 １区第２面南半部全景(東から)……16
写真13 １区北半部土層断面(東から)……18
写真14 １区南半部土層断面(東から)……18
写真15 ２区全景（南から）……20
写真16 ３区全景（東から）……21
写真17 ３区全景（西から）……21
写真18 ２区土層断面（北から）……21
写真19 ２区土層断面（東から）……21
写真20 ３区土層断面（北から）……22
写真21 ３Ｍトレンチ調査風景……22
写真22 ３区石器出土……22
写真23 溝14遺物出土状況（北から）……23
写真24 古墳全景（北東から）……23
写真25 溝23遺物出土状況（東から）……29
写真26 須恵器と土師器（東から）……29
写真27 溝23遺物出土状況（南東から）……30
写真28 須恵器（北西から）……30
写真29 溝23遺物出土状況（東から）……30
写真30 須恵器（西から）……30
写真31 溝23遺物出土状況（北から）……30
写真32 須恵器（北から）……30
写真33 10Ｄトレンチ北半部全景（南から）……33
写真34 10Ｄトレンチ南半部全景（南から）……34
写真35 10Ｄトレンチ全景（南から）…35～36
写真36 10Ｄトレンチ土層断面(西から)…35～36
写真37 11Ｄトレンチ土層断面(西から)…35～36

写真38 11Dトレンチ土層断面(西から)…35～36
写真39 土坑9土層断面（東から）……38
写真40 溝19土層断面（東から）……38
写真41 11Dトレンチ全景（北から）……39
写真42 P12土層断面（南から）……40
写真43 溝2土層断面、P10全景(北から)……40
写真44 土坑3土層断面（東から）……41
写真45 土坑6土層断面（西から）……41
写真46 土坑7土層断面（北から）……41
写真47 土坑1全景（北から）……41
写真48 土坑1土層断面（西から）……43
写真49 土坑1完掘状況（北から）……43
写真50 8Eトレンチ北半部全景(北から)……45
写真51 中央部・南半部全景(南から)……46
写真52 8Eトレンチ土層断面(東から)…47～48
写真53 8Eトレンチ土層断面(東から)…47～48
写真54 9Eトレンチ土層断面(東から)…47～48
写真55 9Eトレンチ土層断面(東から)…47～48
写真56 P69遺物出土状況（西から）……54
写真57 P69土層断面（西から）……54
写真58 P77遺物出土状況（西から）……56
写真59 P77土層断面（西から）……56
写真60 井戸（東から）……60
写真61 土坑12、溝16土層断面(東から)……60
写真62 9Eトレンチ北半部全景(北から)……63
写真63 9Eトレンチ南半部全景(南から)……64
写真64 P15土層断面（東から）……65
写真65 P14土層断面（南から）……65
写真66 10Eトレンチ全景（東から）……68
写真67 10Eトレンチ全景（北から）……68
写真68 10Eトレンチ土層断面(西から)……69
写真69 P323土層断面（南から）……69
写真70 P318土層断面（南から）……69
写真71 P332土層断面（東から）……69
写真72 10F・11Fトレンチ全景（南から）……71
写真73 北半部第2面全景（南から）……72
写真74 中央部・南半部第2面全景(北から)……73
写真75 南半部第2面全景（南から）……74
写真76 北半部第2面全景（東から）……77
写真77 北半部第2面全景（東から）……77
写真78 土層断面（東から）……78
写真79 土層断面（東から）……78
写真80 土層断面（東から）……78
写真81 土層断面（東から）……78
写真82 P365遺物出土状況（西から）……79
写真83 P245土層断面（西から）……79
写真84 P290土層断面（東から）……79
写真85 P208遺物出土状況（南から）……84
写真86 P337遺物出土状況（南から）……84
写真87 P425上層遺物出土状況(北から)……85
写真88 P425下層遺物出土状況(東から)……85
写真89 P382根石出土状況（南から）……86
写真90 溝13、ピット遺物出土状況(東から)……86
写真91 溝13遺物出土状況（東から）……87
写真92 ピット遺物出土状況(東から)……87
写真93 土坑15全景（西から）……90
写真94 土坑15土層断面（東から）……90
写真95 10Fトレンチ北半部第3面全景(南から)……92
写真96 中央部・南半部第3面全景(北東から)……93
写真97 北半部第3面全景(南東から)……94
写真98 第3面落ち込み（北東から）……97
写真99 第3面ピット（東から）……97
写真100 北半部第2面（南東から）……98
写真101 北半部第2面（東から）……98
写真102 中央部第2面（東から）……98
写真103 中央部・南半部第2面(北東から)……98
写真104 北半部土層断面（東から）……100
写真105 南半部土層断面（東から）……100
写真106 P1遺物出土状況（南から）……100
写真107 溝10（西から）……103
写真108 溝11（西から）……103
写真109 12Fトレンチ第2面全景(東から)……105
写真110 丹上・観音寺遺跡出土遺物
(縮尺1～7…2/3、8～11…1/2）……120
写真111 丹上・観音寺遺跡出土遺物……121
写真112 丹上・観音寺遺跡出土遺物……122

表　目　次

表１　丹上・観音寺遺跡　出土石器一覧……112
表２　丹上遺跡出土遺物……114
表３　観音寺遺跡出土遺物……114

Ⅰ．調査に至る経過と調査方法

1．調査に至る経過

大阪府教育委員会及び財団法人大阪文化財センターは、大阪府土木部の委託を受けて、主要地方道大阪中央環状線改良工事に伴う観音寺遺跡と丹上遺跡の発掘調査を、1992年10月５日から３月25日まで行った。調査面積は約6,070m²である。調査地は松原市立部２丁目から４丁目に係る北行き車線の府道部分と通称美原ロータリー部分である。

調査の工期は10月５日からであったが、現地には色々な問題があるために直ちに調査は出来ず、調査に着手出来たのが12月15日からであった。

問題は調査地が日本道路公団が管理する近畿自動車道とその用地に接する事。また交通量の多い道路の中で調査を行わなければ成らないので、走行中の自動車の安全と、調査の安全を確保しなければ成らない事。また掘削された土の置き場所、周辺住民の配慮等であった。しかしこの間にも府土木部富田林事務所、道路公団事務所とガードレール、ネットフェンス撤去、埋設管の有無の立会調査や、各地区での掘削深度再確認の試掘調査を行っている。

2．調査の方法

観音寺遺跡、丹上遺跡の工区割は、近畿自動車道和歌山線の調査時に於いて、里道水路で区分された。観音寺遺跡では、第１次調査時に於いて北から第１調査区、第２調査区――第６調査区の６つの調査区に区分され、第１調査区をＡ地区、第２調査区をＢ地区とＣ地区、第３調査をＤ地区と呼称され、Ｄ地区は更にトレンチ毎に１Ｄトレンチ、２Ｄトレンチ……と呼称し区分された。また

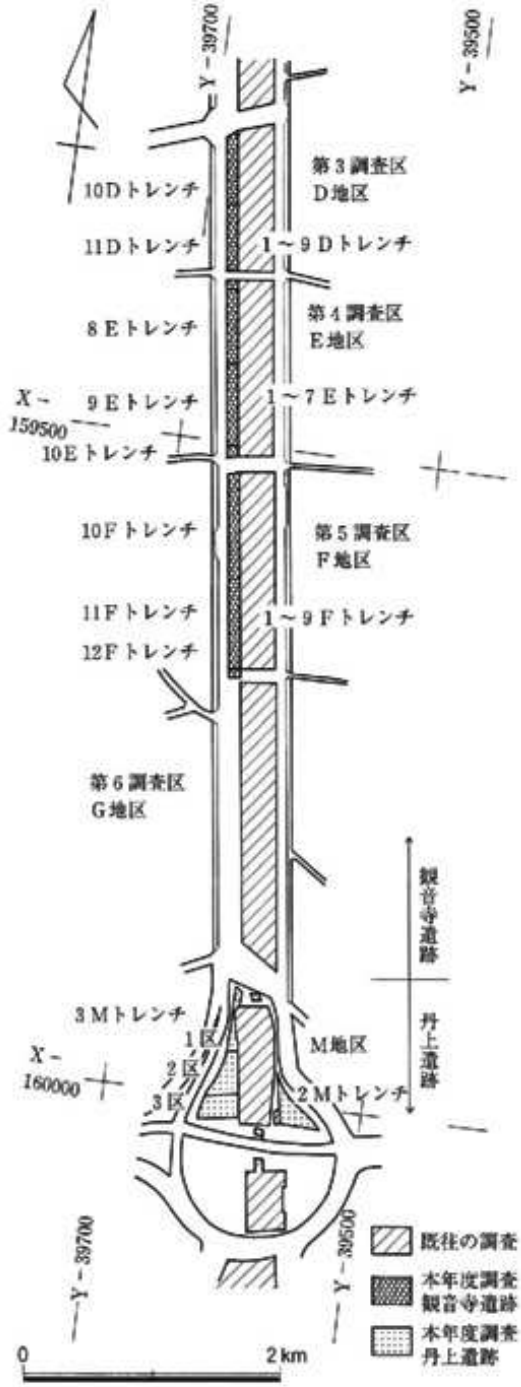


図１　調査区位置図

写真１　試掘調査状況

写真２　10Ｆトレンチ機械掘削状況

写真３　２Ｍトレンチ調査風景

写真４　クレーン車による写真測量風景

丹上遺跡では、調査年度と調査場所によってその１、その２とされているが、ロータリー部分はその３、その５とされ、さらに調査区をＭトレンチ、Ｎトレンチと呼称された。

本調査の調査区名は、既に調査が行われた近畿自動車道の調査時で呼称された調査区名を踏襲する事にした。それによれば観音寺遺跡は「その３」になり、丹上遺跡では「その７」になる。観音寺遺跡では今回、Ｄ地区からＦ地区まで幅約８ｍのトレンチを入れる事になったが、一度に掘削出来ないので２分割にして調査を行った。さらに調査は、里道部分の調査等追加される場合もあった。例えばＤ地区では、２分割にした北側を近畿自動車道調査の続きで10Ｄトレンチ、その南を11Ｄトレンチと呼称した。Ｅ地区とＦ地区では調査を追加されたので、その続きで10Ｅトレンチ、12Ｆトレンチと呼称した。丹上遺跡では東側を２Ｍトレンチ、西側を３Ｍトレンチとなる。３Ｍトレンチでは、３つに分けて調査を行い、北側から１区、２区、３区と呼称した。

遺構実測や遺物の取り上げは基本的にセンターの基本マニュアルに準拠し、国土座標系を使用した。平面の全体遺構図はクレーン車による写真測量を行い、１/20、１/100の図を作成している。また平板測量や遣り方測量を行い、部分の遺構図も作成している。

Ⅱ．位置と環境

1．位置と地形的環境

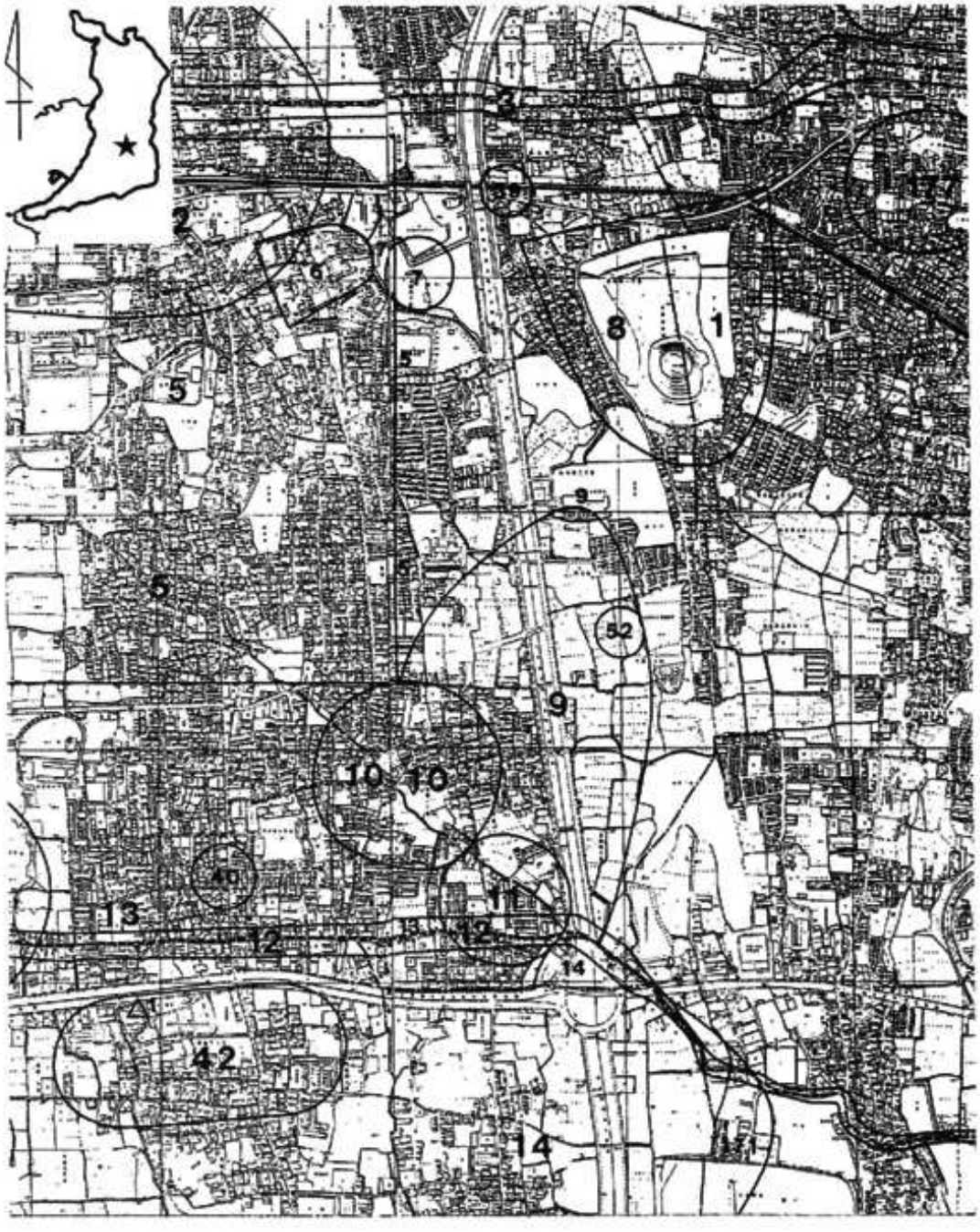
丹上遺跡は美原町丹上地内に所在し、観音寺遺跡は松原市柴垣二丁目・西大塚二丁目から立部二丁目・四丁目にかけて所在する。調査地は丹上遺跡の北端部美原ロータリー内と、観音寺遺跡の中央部に当たる立部二丁目である。

丹上遺跡・観音寺遺跡は、東除川と西除川に挟まれた南北に延びる洪積中位段丘上に在り、段丘面上には浅い谷と、多くの溜池が点在している。これらの池は、開析谷をせき止めて築かれている。大塚山古墳の西側に位置する海泉池・稚児池・寺池・樋野ケ池や、調査区に近い新池・阿湯戸池などがそうである。大和川以南の地域にはそういった池が多く見られ、中・近世以降に農業用として盛んに築造される。最近このような溜池の中を調査されることがあり、遺構や遺物が確認されることもある。遺構・遺物の検出は、単に池の築造時期を決定付けるだけでなく、それより以前の遺跡の存在の手掛かりを与えてくれるので重要である。

2．歴史的環境

近畿自動車道和歌山線の工事に伴って発掘調査を行った結果、観音寺遺跡から太井遺跡まで切れ目なく、遺跡が連なっている事が分かった。旧石器時代では大堀城・丹上・太井遺跡よりサヌカイト製のナイフ形石器や石槍が出土している。縄文時代では太井遺跡で長原式土器や石鏃が、丹上・真福寺遺跡で石鏃が出土している。本調査の丹上・観音寺遺跡においても旧石器時代から縄文時代の石器を確認している（写真110）。弥生時代では太井遺跡から弥生前期の土器が、真福寺遺跡から中期と思われる石包丁、後期の甕形土器等が出土している。本調査区では３Ｍトレンチで石鏃を確認している。本遺跡とは少し離れているが、この時代の遺跡として瓜破・河合・北新町４丁目・北新町５丁目遺跡がある。

古墳時代では本調査地の北方に、全長550mの前方後円墳の大塚山古墳が、更にその北方に全長200mの前方後円墳の一屋古墳、丸山・平塚古墳（雄略天皇陵古墳）が存在する。また南方には全長114mの前方後円墳の黒姫山古墳が存在する。時期が大塚山古墳の主体部が横穴式石室と推測されており古墳時代後期と考えられている。黒姫山古墳は竪穴式石室の中から甲冑・刀・剣等の武器武具類が検出され、時期は５世紀中頃から５世紀後半に位置付けられている。本調査地では封土が削平された方墳を確認したが、山ノ内古墳や榛現山古墳の様に後世に破壊され消失した古墳も多かったと考えられる。古墳以外の遺跡としては、樋野ケ池の須恵器窯跡が在る。時期は６世紀前半と考えられている。古墳時代以降では、丹上・観音寺遺跡の既往の調査で奈良・平安時代の掘立柱建物群や井戸と共に木簡や墨書土器が出土している。また鎌倉・室町時代の掘立柱建物や井戸・溝も確認されている。特に真福寺遺跡では河内鋳物師に係わる鋳造遺構と共に梵鐘・鍋・鏡の鋳型が出土している。また丹上遺跡と観音寺遺跡の境の所に古代官道の丹比道が通っており、丹上遺跡でそれと関連するものと推測される斜向溝が検出されている。



1・8．大塚山古墳　2．上田町遺跡　3．長尾街道(大津道)　5．丹比柴籬宮跡　6．山ノ内古墳　7．橋野ケ池窯跡
9．観音寺遺跡　10．立部遺跡　**11．観音寺跡**　12．竹ノ内街道(丹比道)　13．丹比道周辺遺跡　**14・171．丹上遺跡**
39．西大塚遺跡　40．薬仙寺遺跡　42．丹南遺跡　52．立部古墳群　177．巡我之荘遺跡

図2　丹上・観音寺遺跡の周辺遺跡分布図（1/15000）

Ⅲ．層序の概要

1．丹上遺跡

（1）２Ｍトレンチ

現在の地盤の標高は、北端でＴ．Ｐ．＋35.7mを測り、中央部でＴ．Ｐ．＋36.5m、南端ではＴ．Ｐ．＋36.1mを測り、中央部の地盤がやや高くなっている。本調査区は近畿自動車道の工事と、中央環状線の工事によって大きく改変されており、Ｔ．Ｐ．＋34.8m位まで中央環状線時の盛土である。よってこの高さより下位の層、遺構の残存状況は悪いが、Ｔ．Ｐ．＋34.5m付近の高さで遺構を検出した。この面を第１面とする。その面の上に層厚約0.3～0.4mの旧耕作土と床土が辛うじて残されていた。図３の②・⑦・⑧は遺構面を形成している層であるが、⑦・⑧は段丘層である。土層は⑦がオリーブ黄色～にぶい黄色粘土、また⑧はオリーブ灰色～緑灰色砂質土である。

遺構面は南から北に向かって徐々に低く傾斜し、北端で谷状に大きく落ち窪んでいる。深さは1.3m以上も測る。埋土としては粗砂から礫である。1986年の調査では、この遺構に続く遺構や関連する遺構は見られなかった。第１面の遺構としては先の遺構以外に、浅い土坑やピット、また近世から近代と思われる畦畔状遺構、足跡群を確認している。時期の判別できる遺物は出土していないが、第１面は中世から近世の時期と推測される。

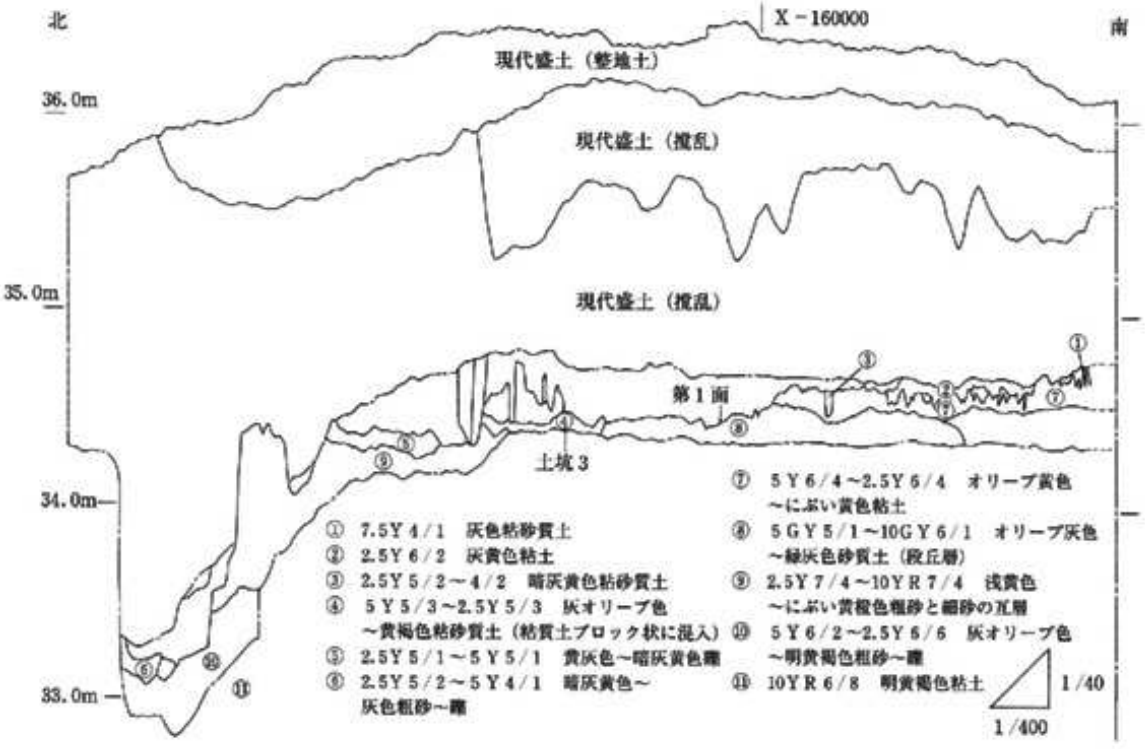


図３　２Ｍトレンチ土層断面図

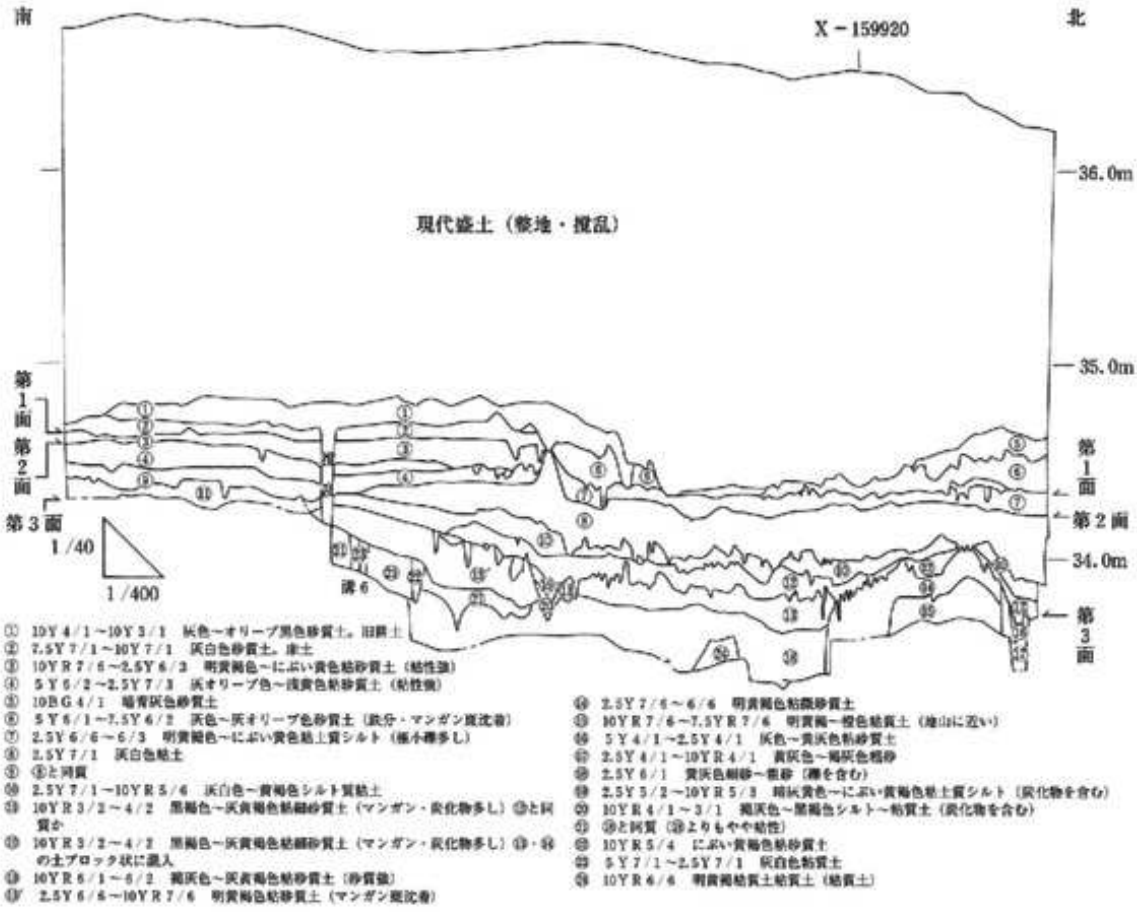


図４　３Ｍトレンチ１区土層断面図

（２）３Ｍトレンチ

本調査区での現地表面の高さは（アスファルト舗装を除く）、１区の北端でＴ．Ｐ．＋36.2mを測り、２区は平均Ｔ．Ｐ．＋38.0mを測る。３区の南端ではＴ．Ｐ．＋38.3mを測る。３Ｍトレンチの北と南では約１mの高低差があり、南から北に向かって傾斜している。２Ｍトレンチと同様に現代の攪乱層が1.5～２mほど厚く堆積している。１区では旧耕作土と床土が良く残り、それより下層の残存状況も良好であった。この調査区では遺構面を３面確認した。先ず床土を除去した面を第１面とし、第２面は１面の形成層を除去した面を第２面とした。第３面は段丘層（所謂地山層）である。第１面は近世以降の鋤溝を、第２面は中・近世で鋤溝とピットを、第３面では古墳時代の溝とピットを確認している。第３面では本区中央部で大きく谷状に落ち窪んでいる所があり、高低差0.7～１mを測る。これはＭトレンチの谷１の続きである。２区から３区の遺構面は２面確認した。第１面は１区と同様で旧耕作土・床土の下面である。その上の攪乱層がこの層にまで及んでいる為に残存状況は良好とは言えないが、鋤溝や浅い落ち込みを確認している。時代は１区と同じである。第２面は１区の２面と３面が重なり合った状況で、中・近世の遺構と古墳時代の遺構が検出される。１区第３面の遺構面の高さはＴ．Ｐ．＋33.7m～＋34.0mで、２・３

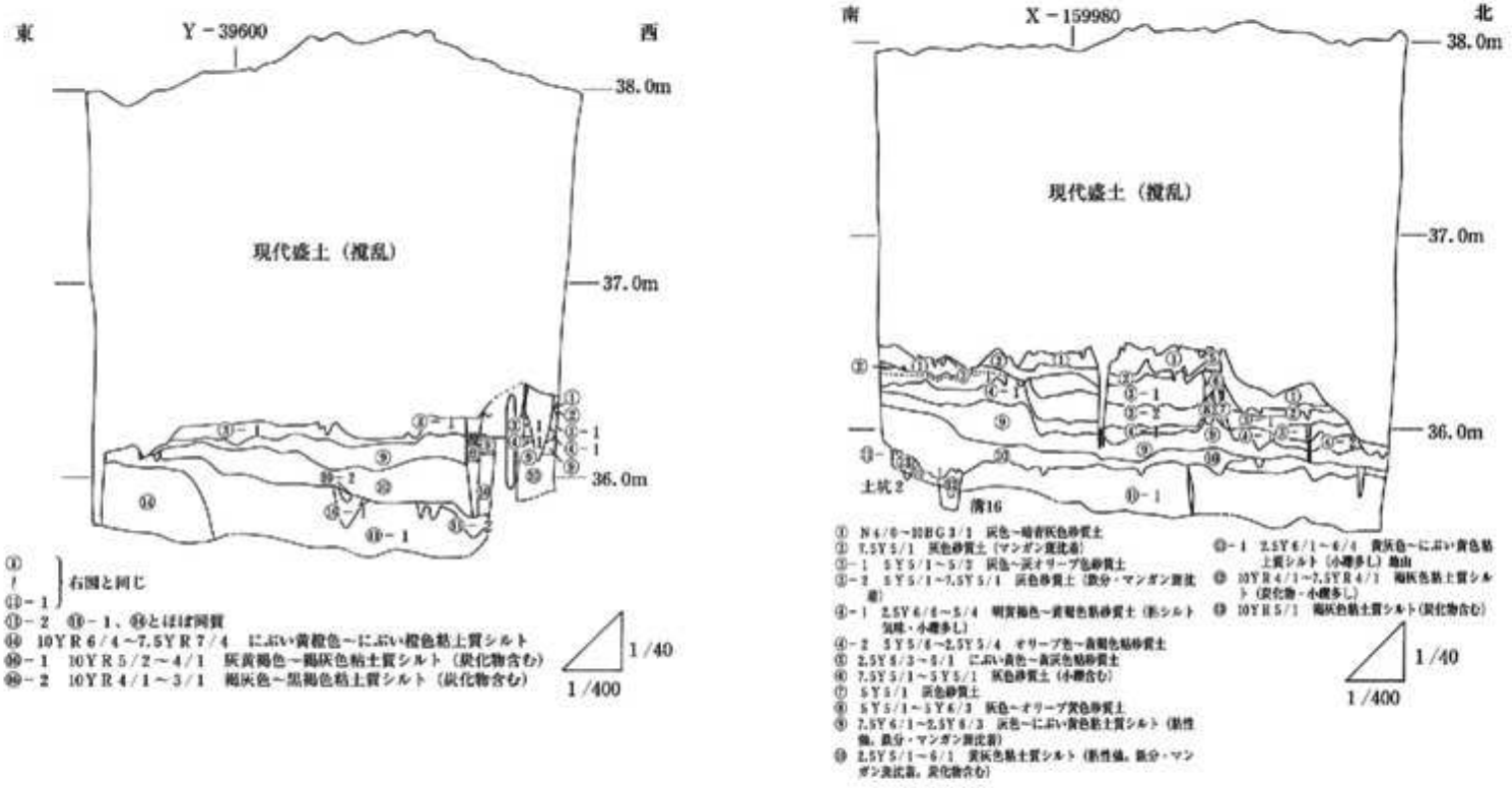


図5　2区土層断面図（左：南壁面、右：西壁面）

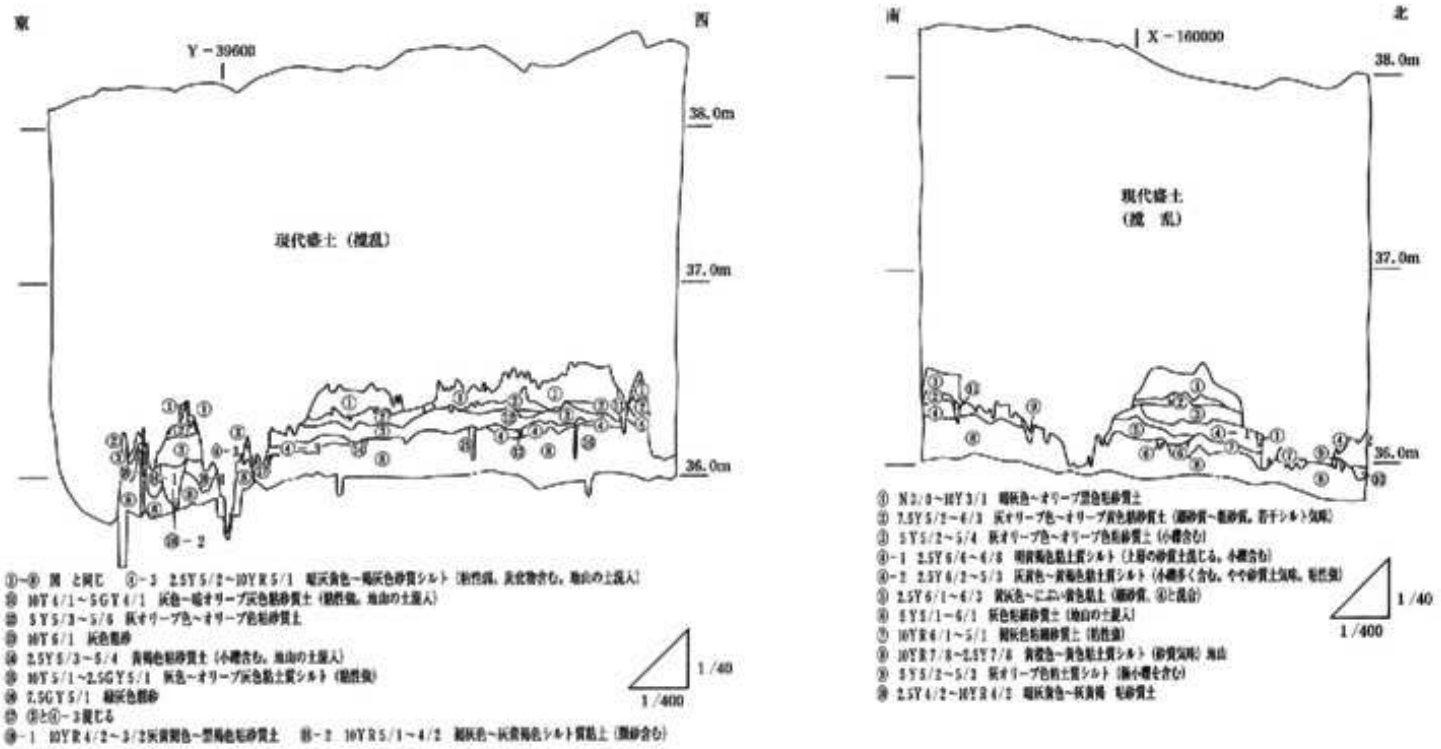


図６　３区土層断面図（左：南壁面、右：西壁面）

区ではT．P．+35.9～36.2mを測る。遺構は段丘層に形成されており、2区では古墳の周溝・ピット・溝・土坑・落ち込みを検出した。古墳の周溝は、Mトレンチで溝5とされていた遺構である。調査時では古墳を想定されていたが、本調査によって古墳である事が明らかになった。2区南端から3区では溝とピットを多数検出し、それ以外にも土坑を検出している。特に溝23はMトレンチの溝2と同じ方向で走行しており、須恵器杯身・蓋が良好な状態で出土した。

2．観音寺遺跡

（1）10D・11Dトレンチ

現地盤の標高は10Dトレンチの北端部でT．P．+32.5m、南端でT．P．+32.7mを測り、11Dトレンチでは北端でT．P．+32.7m、南端でT．P．+33.0mを測る。10Dトレンチと11Dトレンチの高低差は、0.5mを測る。尚、10DトレンチのX－159280ではT．P．+32.3と少し低くなる。地表面から下の層は、現代の攪乱盛土層と、旧耕作土・床土層が堆積している。この旧耕作土・床土層の下面を第1面とした。10Dトレンチでは、南部でこの面を確認した。北半部は攪乱層が第1面と第2面にまで及んでいる。11Dトレンチでは旧耕作土・床土が良く残されおり、第1面・第2面の遺構の残存状況は良好であった。両トレンチの第1面の遺構としては鋤溝がある。第2面は灰オリーブ色～浅黄色、又は明黄褐色の粘砂質土（粘土質～粘シルト質）の段丘層の上面に遺構が形成されている。遺構面の高さも北から南に向かって徐々に高くなり、10Dトレンチの北端でT．P．+30.5m、11Dトレンチの南端でT．P．+31.7mを測る。高低差は約1.2mある。遺構としては近畿自動車道3Dトレンチの古代の溝の続きや、古代～中世にかけてのピット・土坑を確認した。

（2）8E・9E・10Eトレンチ

現地表面の高さは、8Eトレンチの北端でT．P．+33.3mを測り、南端ではT．P．+33.7mを測る。高低差は0.4mを測る。9Eトレンチの南端ではT．P．+34.2mである。10Eトレンチの南端ではT．P．

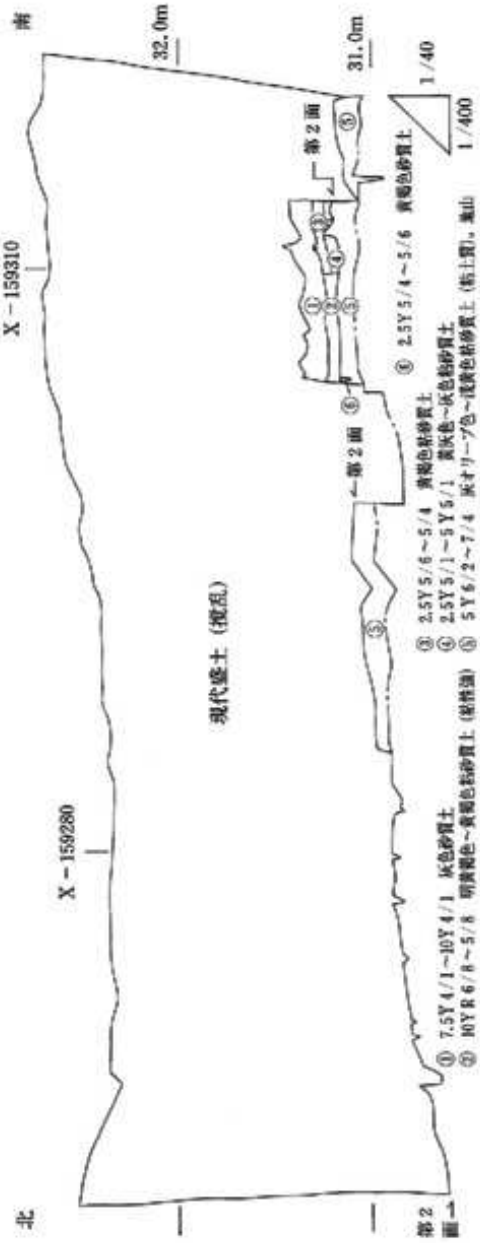


図7　10Dトレンチ土層断面図

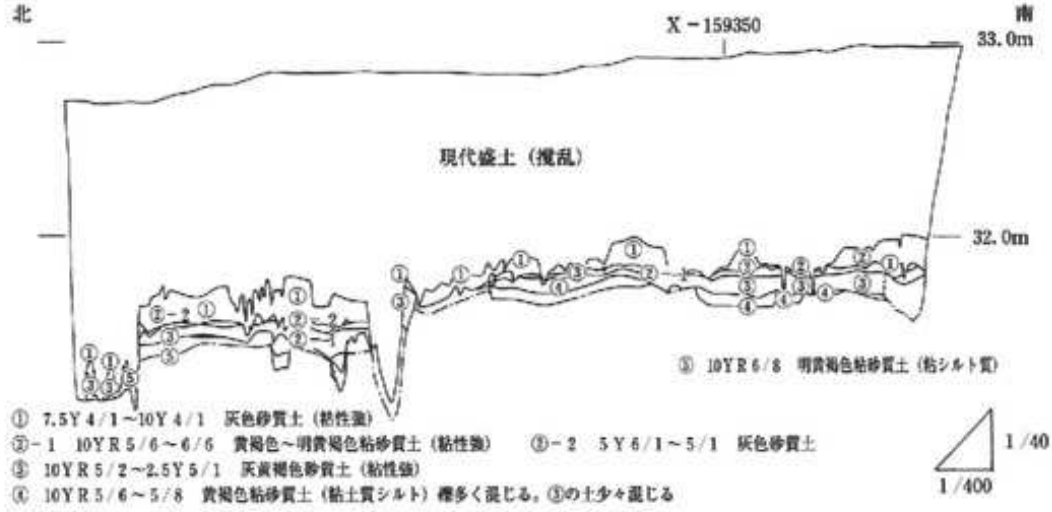


図8　11Dトレンチ土層断面図

＋34.3mになる。標高差は、８Ｅトレンチの北端と10Ｅトレンチの南端で約１ｍある。現代の攪乱盛土層は旧耕作土までに、また一部に遺構面まで堆積しており、各トレンチでは層厚が凡そ１～1.8を測る。各トレンチ共にその下位の旧耕作土及び床土は、一部壊されているものの残り具合が良い。旧耕作土・床土層はオリーブ黒色～灰色の砂質土で、層厚は0.1～0.2mである。この層の下面を第１面とし、多数の鋤溝、畦畔状遺構などを確認した。時代は近世から近代と考えられる。第２面は、８Ｅ・９Ｅトレンチの一部で攪乱層がこの面にまで及んでいるものの、遺構面は全体的に良好である。第２面は明黄褐色～黄色粘砂質土の段丘層の面に形成されている。高さは８Ｅ・９Ｅトレンチの北端でＴ．Ｐ．＋31.5m、Ｔ．Ｐ．＋32.3mを測り、10Ｅトレンチの南端ではＴ．Ｐ．＋32.6mを測る。現地表面と同様に南に向かって高くなる。特に８Ｅトレンチの遺構面の変化が激しい。Ｘ－159400の溝22と溝16の所を境にして改変が著しく、0.25～0.3mの差がある。遺構としては、中世の多数のピットや、土坑、井戸、溝等が存在する。

（３）10Ｆ・11Ｆ・12Ｆトレンチ

現地表面の高さは、10Ｆトレンチの北端でＴ．Ｐ．＋34.3～34.5m、南端でＴ．Ｐ．＋35mを測る。11Ｆトレンチの南端ではＴ．Ｐ．＋35.5m、12Ｆトレンチの南端ではＴ．Ｐ．＋35.6mである。標高差は1.3mである。地表面下は層厚１～1.3mの現代攪乱盛土層が堆積する。この層は場所によって遺構面まで達するが、概ね遺構の残存状況は良い。遺構面は10Ｆトレンチの北半部で３面を確認した以外は、２面で構成されている。10Ｆトレンチでは旧耕作土層と床土層が明瞭に区別でき、第１面は床土層の下面に成る。床土層は灰黄褐色～褐色粘砂質土である。第２面はＸ－159550付近から南端にかけて区別できる。第１面は黄橙色や明黄褐色の粘土質シルト層の下面である。第１面より下では、２枚の遺物包含層と２枚の遺構面を確認した。上層（遺物包含層１）はにぶい黄色～明黄褐色粘砂質土で、下層（遺物包含層２）はにぶい黄色～明黄褐色粘土質シルトである。遺構面は第２面が遺物包含層１の下面で、第３面は遺物包含層２の下面である。第３面のベース

は段丘層である。11F・12Fトレンチでは遺構が2面になる。第3面は、第2面を形成する層を除去しても確認できなかった。遺構としては、第1面で近世・近代の井戸や鋤溝、畦畔・ピットを確認した。第2面では多数のピット、溝、土坑、井戸、落ち込みを確認した。第3面の遺構は特に10Fトレンチの北半部で確認したものであるが、ピットや溝等を検出している。

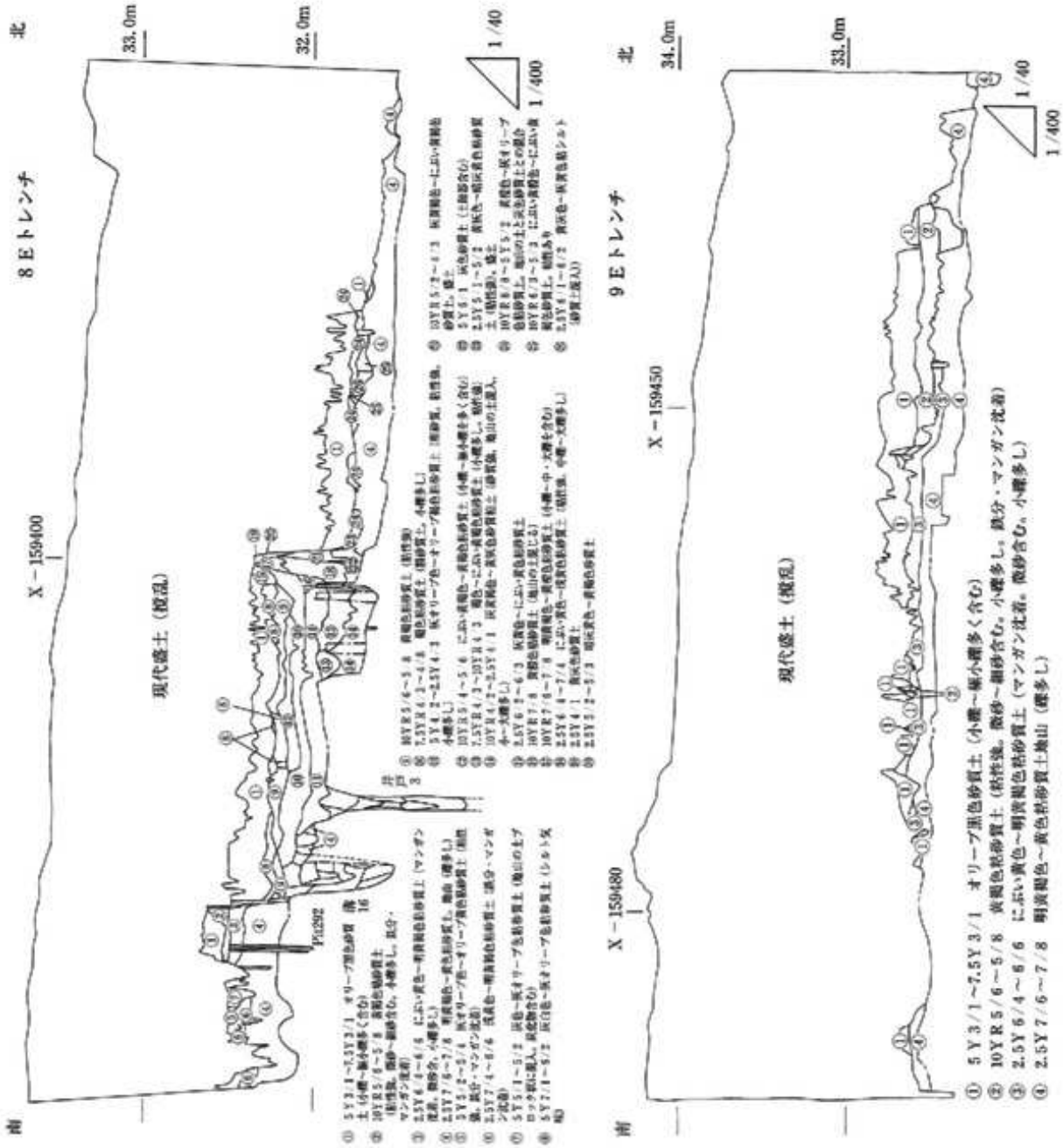


図9　8E・9Eトレンチ土層断面図

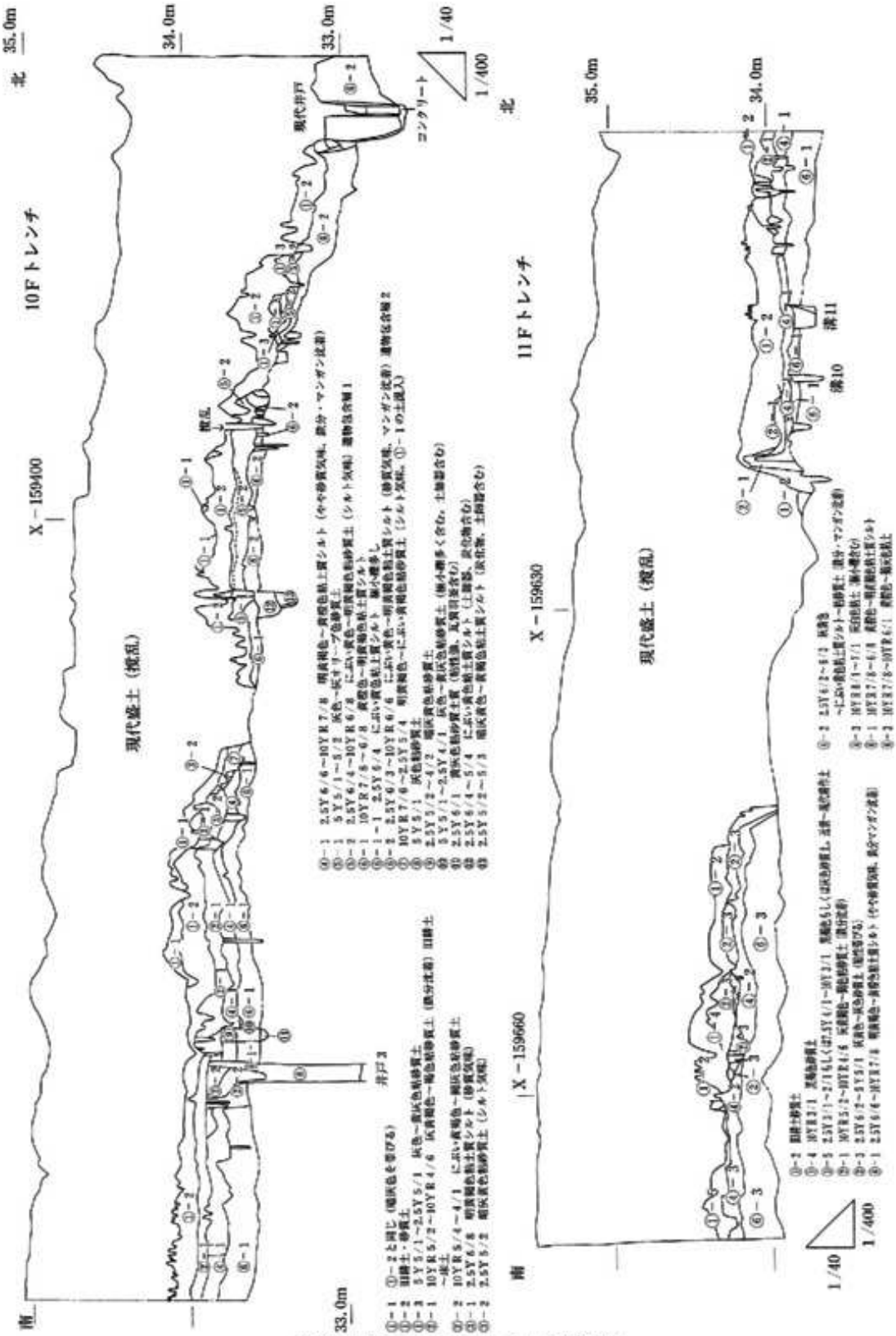


図10　10F・11Fトレンチ土層断面図

Ⅳ．丹上遺跡の調査成果

1．2Mトレンチ

遺構面は1面を確認した。遺構面は南側と東側が高く、北側と西側が低くなる。トレンチの西半部は近畿自動車道橋脚工事(フーチング)によって大きく破壊されている。遺構としては、ピット・土坑・井戸・谷状遺構・足跡を検出した。

ピット

ピットは井戸1・2の周辺と、トレンチ南半部に見られる。井戸周辺のピットは大きさが径0.1m以下、0.2m以下、0.2～0.3mのものに分けられる。井戸1と井戸2の間に南東－北西方向に並ぶピットがある。ピット間の距離は約1.5mを測る。遺物は土師器片が少量出土している。

南半部のピットは、径が0.1～0.2m、0.2～0.3m、0.3～0.4mのものに分けられ、とくに土坑1の西側と土坑4付近に0.3～0.4mのピットが見られる。現在の水路に接して位置する。畦畔状

写真5　2Mトレンチ土層断面（西から）

写真6　北端部土層断面（西から）

写真7　2Mトレンチ全景（南から）

写真8　土坑2・4、ピット（南から）

の高まりの裾部や東端に、幾つか並んでいるのが見られる。

ピットの埋土は井戸周辺のものが5Y5/1～4/1灰色砂質土で、土坑1の西側のものが2.5Y5/4～7.5Y7/1灰白色粘土～粘質土である。また土坑4付近では2.5Y3/1黒褐色シルトで、畦畔状高まりの東端ではN3/0暗灰色粘土である。

土坑

土坑は4基検出したが、いずれも上部は削平を受けていた。土坑1は、平面形が不整な方形を呈している。大きさは4.1×3.8m、深さは0.05mから0.1mを測る。埋土は5Y5/2～5Y6/4

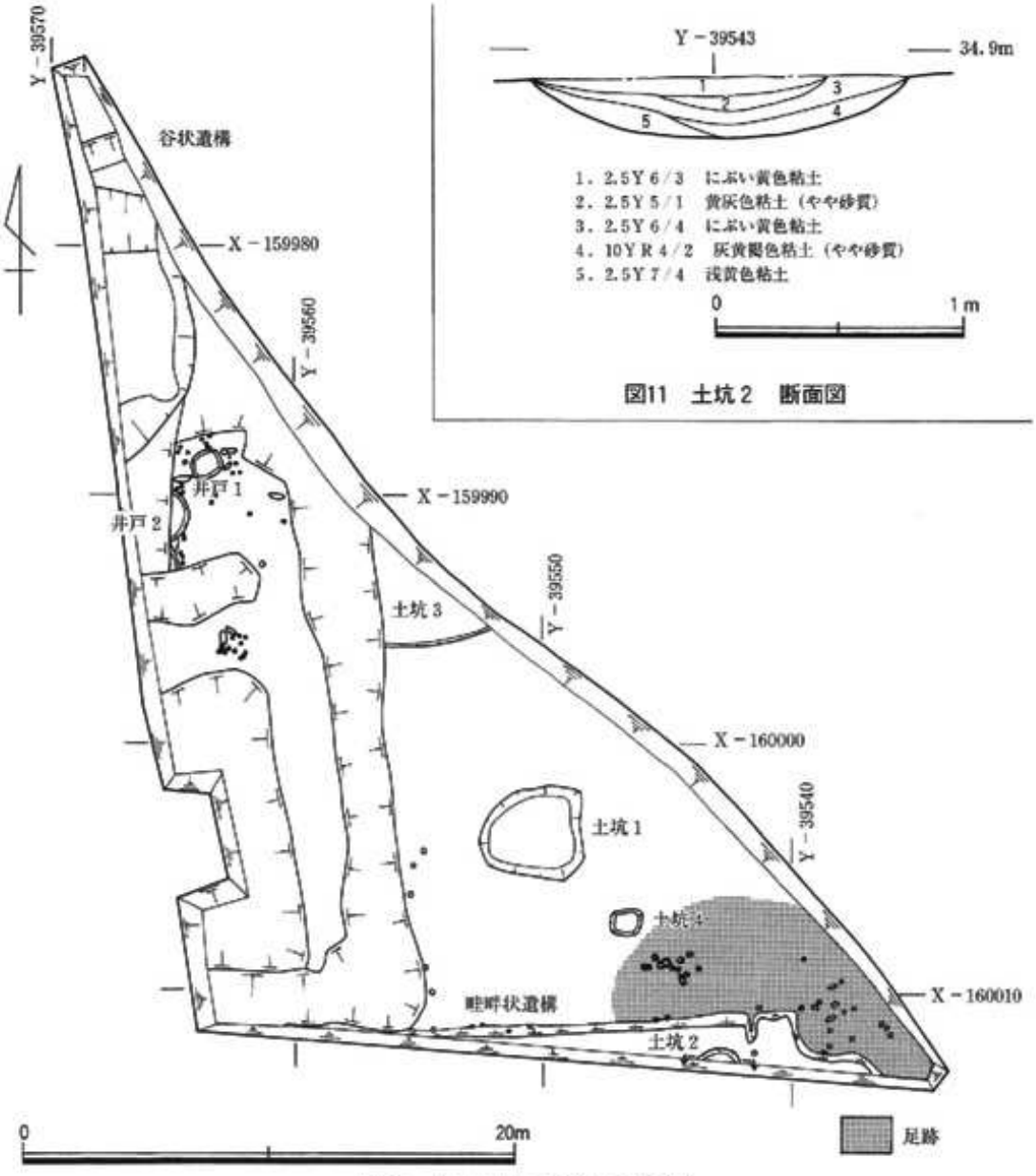


図11　土坑2　断面図

図12　2Mトレンチ第1面平面図

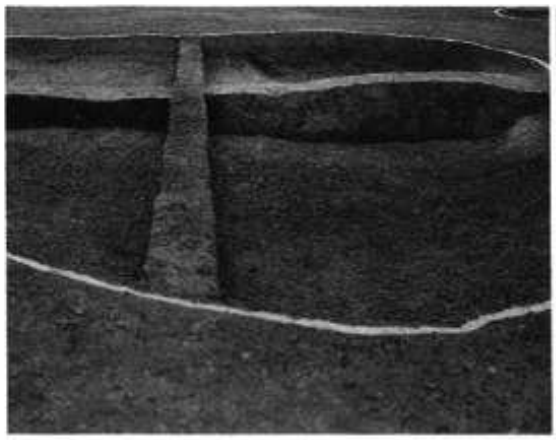


写真９　土坑１土層断面（西から）

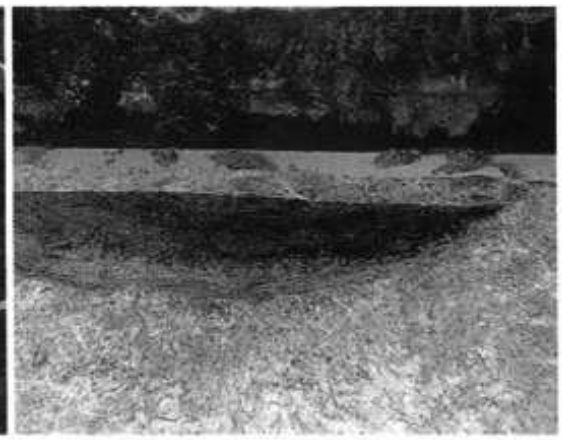


写真10　土坑２土層断面（南から）

灰オリーブ色～オリーブ黄色の砂質土である。埋土の中には粘質土がブロック状に混入しているのが見られる。土坑２は畦畔状遺構の上面に掘り窪められており、現存長が1.8×0.6m、深さが0.25mを測る。埋土は大きく３層に分けられ、上層よりにぶい黄色～黄灰色粘土、にぶい黄色粘土、灰黄褐色～浅黄色粘土である。土坑３は土坑１の北側に位置し、大半が後世に破壊されている。落ち込みや浅い溝の可能性もあるが、とりあえず土坑としておく。残存長は４m、深さは0.2mを測る。埋土は、灰オリーブ色～黄褐色粘砂質土（粘質土ブロック状に混入）である。土坑４は他の土坑に比して小さく、大きさは1.3×1.1mの不整な方形を呈している。深さは約５cmである。埋土は2.5Y３/１黒褐色シルトである。

井戸

井戸は２基検出した。谷状遺構の南側に近接している。井戸１は大きさが1.2×1.1m、深さ0.13mを測る。平面形は楕円形を呈する。上部は削平されているものの、内部で桶の痕跡を確認した。埋土は2.5Y４/１黄灰色砂質土である。井戸２は約１/３残存する。残存長は２×0.7m、深さは0.3～0.34mを測る。埋土は、2.5Y４/１～10Y３/１黄灰色～オリーブ黒色砂質土（粘質土気味である。

谷状遺構

調査区の北端に位置する。本遺構が谷であるかどうか不明なので「谷状遺構」とした。残存長は６m、幅約10m以上、深さは1.3m以上（危険なので完掘していない）を測る。南側は段丘層を段状に大きく切り込んでいる。埋土は上層から浅黄色～にぶい黄橙色粗砂と細砂の互層、灰オリーブ色～明黄褐色の粗砂～礫、明黄褐色粘土が堆積している。遺物は土器細片があるが、時期は不明である。なお隣接するＭトレンチには、本遺構に続く遺構は検出されていない。

畦畔状遺構・足跡

畦畔状遺構は現在の水路で切られているが、主軸を東西方向におく。盛土の痕跡は、一部観察出来た。高さは約0.2m測る。足跡は、畦畔状遺構の周辺で多数検出した。

2．3Mトレンチ

（1）1区

遺構面は3面を確認した。地形的に南へ向かって高くなる為に、調査区の南半部では第2面と第3面の遺構が同一面で検出される。第1面は、旧耕作土層と床土層を除去した面である。遺構は鋤溝や畦畔を検出した。遺構面の時代は近代～近世である。第2面は特に南半部で顕著に見られる。遺構としては鋤・溝がある。また北半部では、この面において獣骨が出土している。遺構面の時代は中世～近世である。第3面は主として北半部で確認した面であるが、南半部では先記した様に遺構が重複している。遺構としてはピット・溝がある。遺構面の時代は古墳時代である。

ピット

ピットは、北半部と南半部で多数検出した。この中でＰ１・Ｐ２が確実に第２面の遺構である。この２基は、他のピットに比してやや大きいものである。径はＰ１が0.6m、Ｐ２は0.4mである。両ピットの埋土には多くの鉄分と炭化物が見られた。遺物はＰ１より瓦器碗片（図81－10）が出土している。柱根を確認出来たのは、Ｐ６・12・27・35・45・46・76・78・99である。特にＰ78・99は大きさも大きく、掘り方の平面形が方形を呈している。Ｐ78は0.7×0.6m、Ｐ99は0.5×0.4mを測る。Ｐ59やＰ79も同様の大きさである。他のピットは、径が0.1～0.3mを測る。埋土は溝２の北側が10ＹＲ４／１～３／２褐灰色～黒褐色砂質土と2.5Ｙ６／１～５／１黄灰色砂質土、南側が10ＹＲ４／１～３／２褐灰色～黒褐色砂質土と2.5Ｙ６／２～５／２灰黄色～暗灰黄色砂質土である。また南半部では攪乱坑から西側が2.5Ｙ４／２暗灰黄色砂質土で、南端が7.5Ｙ６／１～10Ｙ６／１灰色砂質土である。これらピットの柱根の埋土は、Ｐ６・27・35・45・46・が10ＹＲ４／１～３／２褐灰色～黒褐色砂質土である。またＰ12は５Ｙ４／１灰色砂質土である。Ｐ76・78・99は2.5Ｙ６／３にぶい黄色粘砂質土である。とくに埋土中では炭化物が見られた。

これらのピットの中に並ぶものが幾つかある。北半部では、溝２の北側に溝１と同一方向のピッ

写真11　1区第3面北半部全景（東から）

写真12　1区第2面南半部全景（東から）

ト列が２条存在し、主軸を北東－南西方向においている。またＰ１の東側には南北方向に並んでいるピット列が存在する。南半部では、土坑１と落ち込み１との間で２条存在する。主軸方向は北西－南東方向においている。

土坑

落ち込み、ピットの中に本遺構と考えられるものがあるかも知れないが、ここでは埋土で仮に分けた。土坑には、段丘の土（地山）がブロック状に混入していた。土坑１は半分が調査区外であるが、大きさは径２ｍを測る。埋土は2.5Ｙ４／２暗灰色砂質土である。

落ち込み

落ち込みは南半部で５基確認した。平面形が円形のものや、不整な方形のものが見られる。大きさは、最大長が0.9～1.6mを測り、深さが0.03～0.1mである。埋土は落ち込み１～３が2.5Ｙ

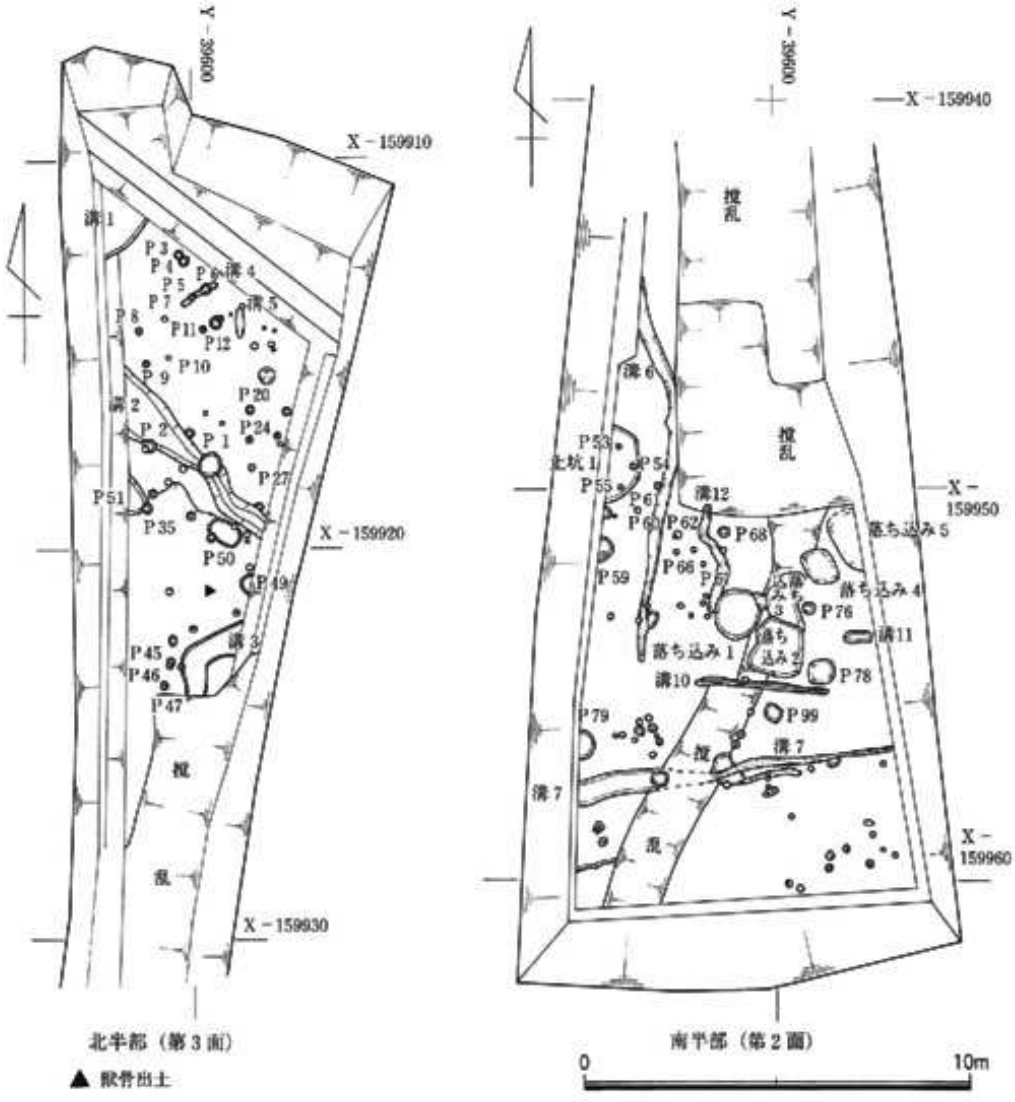


図13　３Ｍトレンチ１区第２・第３面平面図

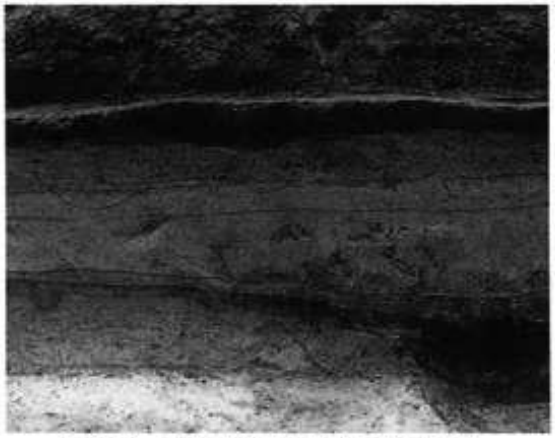


写真13　1区北半部土層断面（東から）

写真14　1区南半部土層断面（東から）

6／3にぶい黄色砂質土で、落ち込み4・5が7.5Y 6／1～10Y 6／1灰色砂質土である。

溝

溝は耕作に伴った溝と、明らかにそれと区別出来る溝を確認した。前者は幅が0.1～0.3mを測り、深さも浅いもので（但し耕作で深く及ぶ場合がある）、鋤溝と考えられる。後者は溝1～3である。第3面で存在する鋤溝は、第1～2面での溝である。鋤溝の主軸は、南北方向、北東－南西方向、東西方向、北西－南東方向と分けられる。埋土は、北半部の鋤溝が10YR 4／1～3／2褐灰色～黒褐色砂質土で、南半部は東西の鋤溝が7.5Y 6／1～10Y 6／1灰色砂質土である。

溝1は北半部の北西端で検出した。大半が調査区外である。幅は1.5m以上ある。深さは約0.5mである。埋土は、上層から5Y 4／1～2.5Y 4／1灰色～黄灰色粘砂質土で、下層は2.5Y 4／1～10YR 4／1黄灰色～褐灰色粗砂（粘質強）である。主軸方向は不明であるが、北東－南西方向におくものと推測される。

溝2は北半部中央に位置する。現存長約5.5m、深さ約0.2mを測る。主軸は北西－南東方向におき、南東方向から北西方向に蛇行しながら走行している。埋土は3層に分けられ、上層より2.5Y 5／1～6／1黄灰色粘砂質土（シルト質粘土気味）、2.5Y 5／1黄灰色粘砂質土（粗砂を多く含む）、2.5Y 5／1～2.5Y 6／6黄灰色～明黄褐色粘砂質土（地山土ブロック状に混入）である。土層観察より人為的に掘削された事が伺える。溝内からは古墳時代と思われる須恵器片が出土している。

溝3は北半部の南東端で検出した。溝の平面形はくの字状を呈しており、北東方向から南方向へ走行している。幅は0.5～1mを測り、深さは約0.12mを測る。埋土は、10YR 4／1褐灰色砂質土である。深さは、溝1・2にと比較して非常に浅いものである。

獣骨

獣骨の検出した位置は、北半部の溝2と溝3の間で、少し低くなった箇所である。検出した面は第2面である。遺構に伴うものかどうか丹念に精査したが、見い出せなかった。牛か馬の脚部と推測される。

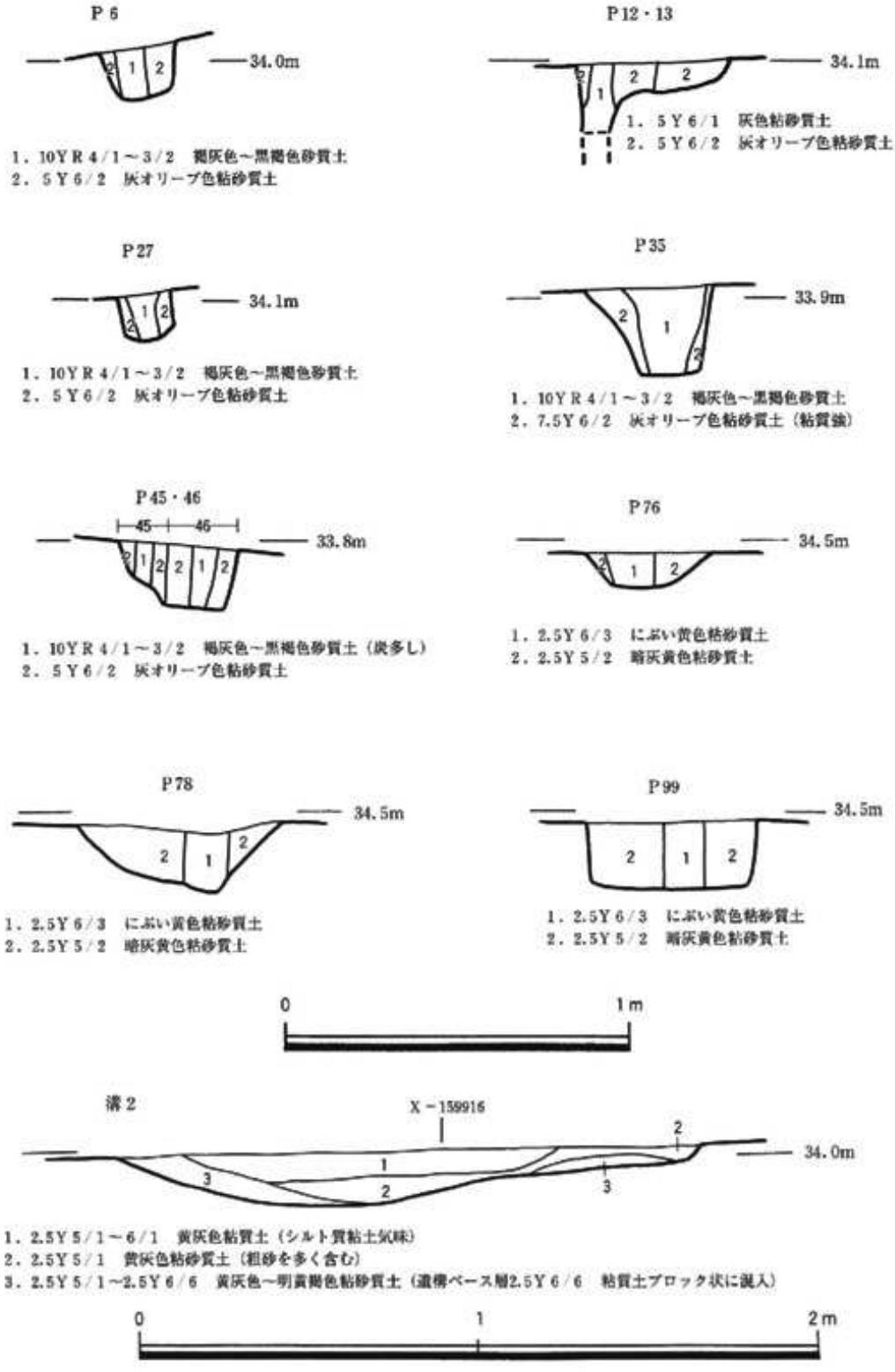

P 6
34.0m
1. 10YR 4/1～3/2　褐灰色～黒褐色砂質土
2. 5Y 6/2　灰オリーブ色粘砂質土
P12・13
34.1m
1. 5Y 6/1　灰色粘砂質土
2. 5Y 6/2　灰オリーブ色粘砂質土
P27
34.1m
1. 10YR 4/1～3/2　褐灰色～黒褐色砂質土
2. 5Y 6/2　灰オリーブ色粘砂質土
P35
33.9m
1. 10YR 4/1～3/2　褐灰色～黒褐色砂質土
2. 7.5Y 6/2　灰オリーブ色粘砂質土（粘質強）
P45・46
45
46
33.8m
1. 10YR 4/1～3/2　褐灰色～黒褐色砂質土（炭多し）
2. 5Y 6/2　灰オリーブ色粘砂質土
P76
34.5m
1. 2.5Y 6/3　にぶい黄色粘砂質土
2. 2.5Y 5/2　暗灰黄色粘砂質土
P78
34.5m
1. 2.5Y 6/3　にぶい黄色粘砂質土
2. 2.5Y 5/2　暗灰黄色粘砂質土
P99
34.5m
1. 2.5Y 6/3　にぶい黄色粘砂質土
2. 2.5Y 5/2　暗灰黄色粘砂質土
0
1m
溝 2
X－159916
34.0m
1. 2.5Y 5/1～6/1　黄灰色粘質土（シルト質粘土気味）
2. 2.5Y 5/1　黄灰色粘砂質土（粗砂を多く含む）
3. 2.5Y 5/1～2.5Y 6/6　黄灰色～明黄褐色粘砂質土（遺構ベース層2.5Y 6/6　粘質土ブロック状に混入）
0
1
2m

図14　ピット、溝断面図

（2）2区・3区

2区・3区では遺構面を2面検出した。第1面は1区と同様に旧耕作土と床土を除去した面である。2区の北端では、攪乱層が第2面の近くまで大きく及んでいるために、第1面の残りが非常に悪い。2区の北端と南端では約0.2mの差がある。3区の南端では2区の南端と同じ高さである。遺構としては、鋤溝や畦畔を検出している。2区のX－159972.5ラインで畦畔を確認した。

写真15　2区全景（南から）

写真16　3区全景（東から）

写真17　3区全景（西から）

写真18　2区土層断面（北から）

写真19　2区土層断面（東から）

この畦畔は坪境の畦畔か。断面の観察によれば、第2面に至るまでに同じ位置で、畦畔が数回築かれており、少なくとも3回伺える。この事実から水田面は3時期に亘って形成されたものと推測される。2区南端では第2面と第3面の層間が約0.3mを測る。特にX－159982付近から南端にかけて高くなるのは、第2面の影響によるものと考えられる。第2面まで一応掘り分けて、面を検出したが、先の遺構と第2面の古墳周溝を切る井戸、そして溝、落ち込みを確認した。井戸については便宜上第2面の遺構と一緒に後述する。第2面の標高は、西壁面で観察すると、2区の北端でT.P.＋35.74～35.78mを測り、同区南端でT.P.＋35.8～35.84mを測る。3区では南端でT.P.＋36.24mを測る。2区の北端と3区の南端では0.5m程の差があり、南に向かって高くなる。東西間の標高差は2区で約0.2～0.3mある。3区では、南端を見ると南西隅でT.P.＋36.24mを測り、南東端ではT.P.＋35.8mを測る。約0.4mの差で東へ向いて低くなる地形である。以上の様な複雑な地形に遺構面が形成されている。遺構は中・近世のものと、古代のものと、古墳時代のものが存在する。中・近世のものは溝、井戸、落ち込みで、古代は溝、古墳時代は古墳である。それより以前のものとしては、遺物のみの確認ではあるが、弥生時代と縄文時代

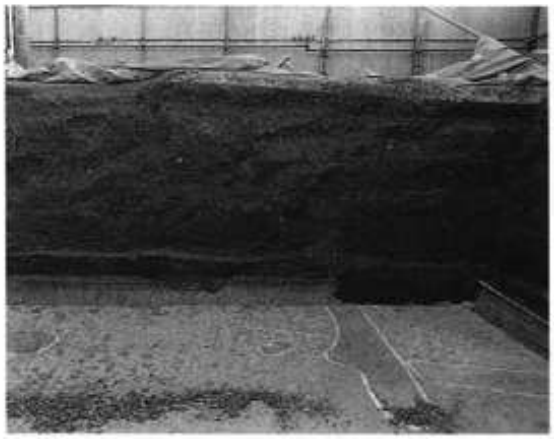


写真20　3区土層断面（北から）

写真21　3Mトレンチ調査風景

写真22　3区石器出土

のサヌカイト製の石器が多く出土している。その中に石鏃や刃器が認められる。

古墳

古墳は2区の中央部東側で、平面形が逆のコの字形を成す溝14を確認した。本遺構はMトレンチで確認された溝5の続きに当たる。本遺構が検出される遺構面は、中・近世に大きく削平を受け、本遺構も免れる事はできなかった様である。よって古墳の盛土と主体部は、丹念に精査を行ったにも係わらず、残念ながら痕跡すら確認できなかった。

墳形は溝14の内側をみると、北西コーナーと南西コーナーがやや角が取れて円くなすが、溝の外縁が直線状を成し、同様にMトレンチの溝5の外縁の形状も直線状を成すことから、方形の古墳である。溝14の内側の変形が著しいのは、Mトレンチの溝5も同様で、後世の削平によるものである。

古墳の大きさは溝14の内側で測ると、南北は約9.8m、東西は現存長約4.5～5.5mを測る。東西の長さは、Mトレンチの長さを加えると約9.5～9.6mになる。墳丘は本来の姿を留めていないので高さは不明であるが、南端で残存している箇所から南端溝14の底部まで約0.4mを測る。

溝14は幅が北側で1.3m、北西コーナーで2.4m、南西コーナーで3.7m、南側で1.9mを測り、南西コーナーが広くなる。溝の底部はやや円みを持ち、断面形が皿状になる。埋土は上層より2.5Y 5/1～4/1黄灰色粘土質シルト、2.5Y 5/3～5/4黄褐色粘土質シルト（極小礫多く含む）である。溝底部にはさらに土坑状に掘削されており、北西コーナー部、西側中央部、南西コーナー部に位置する。溝内の土坑の深さは0.14～0.19mを測り、埋土は2.5Y 5/4黄褐色粘砂質土や2.5Y 5/6黄褐色シルト質粘土（小礫含む）である。また溝内にはピットも有する。平面形

は楕円形で、径0.4×0.3mを測る。埋土は5Y6/1灰色粘シルトである。

遺物としては、須恵器の甕が（写真111－1、図82－1）1点出土しているのみである。甕は南側の溝14内から出土した。出土層は上層の2.5Y5/1～4/1黄灰色粘土質シルト層である。甕は口縁部を上にし、胴部の円孔を北側に、すなわち墳丘に向けて押しつぶされた状態で出土した。なお底部は打ち欠かれている。須恵器は中村編年でⅠ型式3段階から4段階と考えられ、Mトレンチ溝5の北東コーナー部で検出された口縁部に打ち欠きのある須恵器壺とは、ほぼ同時期と思われる。

写真23　溝14遺物出土状況（北から）

ピット

2区・3区で多数のピットを検出した。ピットの総てが同一時期のものではなく、近世・中世、古代、古墳時代と3時期に分かれるものと考えられるが、ピットからの出土遺物は皆無に等しく、時代別に分けることが困難なものとなっているので、とりあえず総て一括して記述

写真24　古墳全景（北東から）

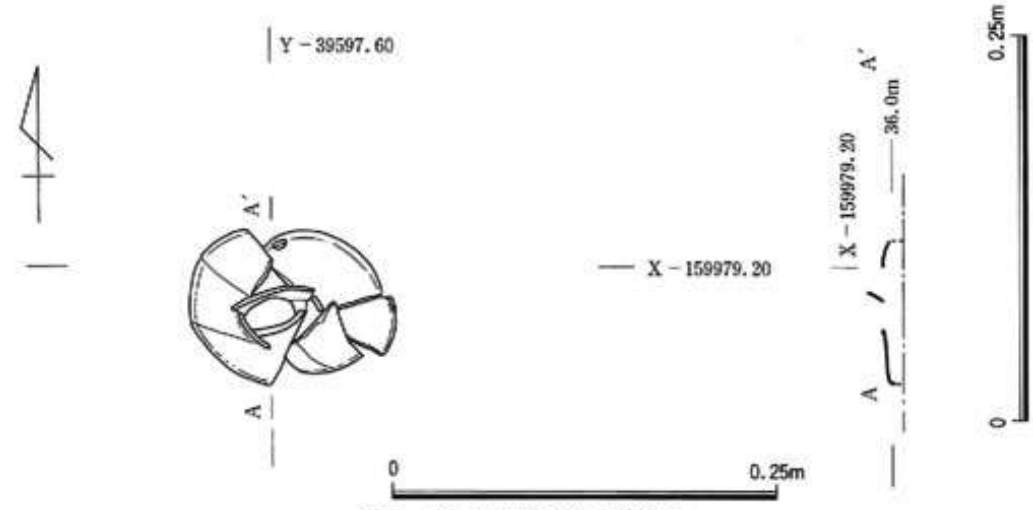


図15　3区溝14遺物出土状況図

しておくことにする。

先ず遺構面を外観した時に目に付くのは、2区よりも3区の方が、圧倒的にピットの数量が多いと云う事である。2区でも特に古墳の付近や南西側に目立ち、それより以南に増えていく傾向にあり、特に溝23を境にしてその数が変わる。

ピットの大きさは、径0.1m未満から0.6mのものが確認できる。特に径0.3mから0.6mのピットは、3区で多く検出される。図16・18のように柱根の痕跡が確認できるものも存在する。

2区のピットは、先述したように古墳の北側と、古墳の南東コーナー付近、さらに溝16付近に存在する。3区と比較してその数が少ないのは、後世に削平を受けているからである。現状では建物が建つ様な状況ではないが、注意して見ると直線上に並ぶものがある。例えば古墳の西側に隣接して位置するピットや、溝16の南側のピットである。またこれらピットの中に柱根の痕跡を確認できたものが幾つかある。P148・541・542がそれである。なおP148の柱根痕跡には炭化物が見られる。ピットの埋土を見ると、P159・160等古墳の北側に位置するピットについては、5Y5/1～6/1・7.5Y6/1灰色粘シルトが多く、P147・148・542付近では2.5Y5/1黄灰色粘砂質土が多い。

3区のピット総数は、遺構登録をしたのが379基である。一見乱雑に存在しているかの様であるが、細かく見ると2区のピットと同様に並んでいるものがある。先ず溝38の東側に位置するピット群である。ピットはP218・221・223・224・400・399・231と並ぶ。主軸は北西－南東方向におく。ピット間の距離は、P218・221・223と、P224・400・231が約1mを測る。このピット列を中心にしてP218・217・216が並び、さらにP395・397・400・230が並んでいる。2列のピットの主軸方向は、北東－南西方向においている。ピット間の距離は、前者が0.7～0.9mを、後者（P395・397・400）が0.9～1mを測る。埋土は全体的に、掘り方内が2.5Y6/2～5Y5/1灰黄色～灰色粘土質シルト（砂質気味）柱根の痕跡は2.5Y5/1～5/2黄灰色～暗灰黄色粘土

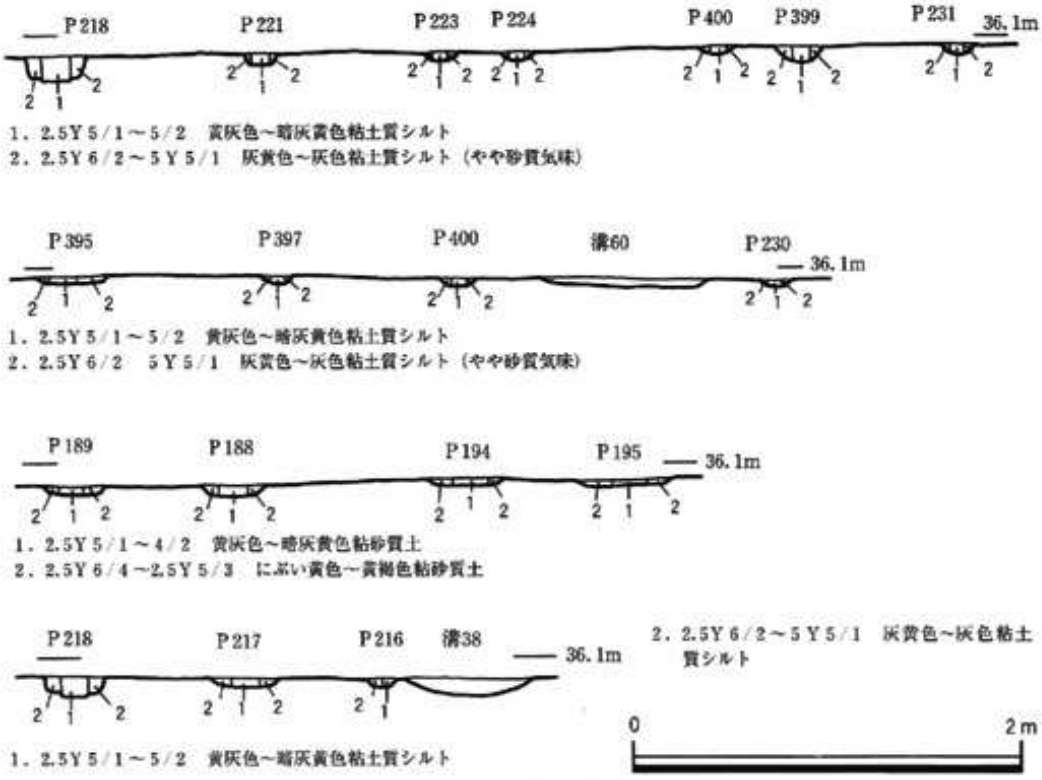


図16　3区ピット断面図

質シルトである。この一群のピットの平面形は、P217・229を除いて円形である。

溝23の西側、落ち込み14や土坑3～7の付近にも幾つか並ぶピット列が存在する。そのうち、P189・188・194・195は、直径が0.3～0.5mを測り、平面形はほぼ円形を呈する。ピット列の主軸は北西－南東方向においている。ピット間の距離は、0.8～1.2mを測り、P189・188と194・195はほぼ同じ距離である。いずれのピットにも柱根の痕跡が認められた。埋土は柱根痕跡が2.5Y 5/1～4/2黄灰色～暗灰黄色粘砂質土で、掘り方内が2.5Y 6/4～5/3にぶい黄色～黄褐色粘砂質土である。この4基のピット付近では、2.5Y 5/1～4/2黄灰色～暗灰黄色粘砂質土を有するものが多い。

土坑3～8付近のピットの埋土は、5Y 5/2～5/3灰オリーブ色粘土質シルト（極小礫を含む）である。この付近のピットの平面形は、円形を呈するものが多いが、中に方形に近いものもある。

溝23の中に多く存在するピットについては、先ず溝と同一時期のものかどうか不明であり、また溝と関連があるものかどうかも不明である。ピットは溝の肩部付近と、肩部から底部に至る箇所に見られる。位置的には、中央部から南東部にかけて多く見られる。平面形は、多くが円形である。大きさは、径0.1～0.3・0.4mを測り、深さは0.05～0.1mを測る。埋土は柱根痕跡が2.5Y 5/1～10YR 5/1黄灰色～褐灰色粘砂質土（粘性強）、10YR 5/1～6/1褐灰色粘シルト

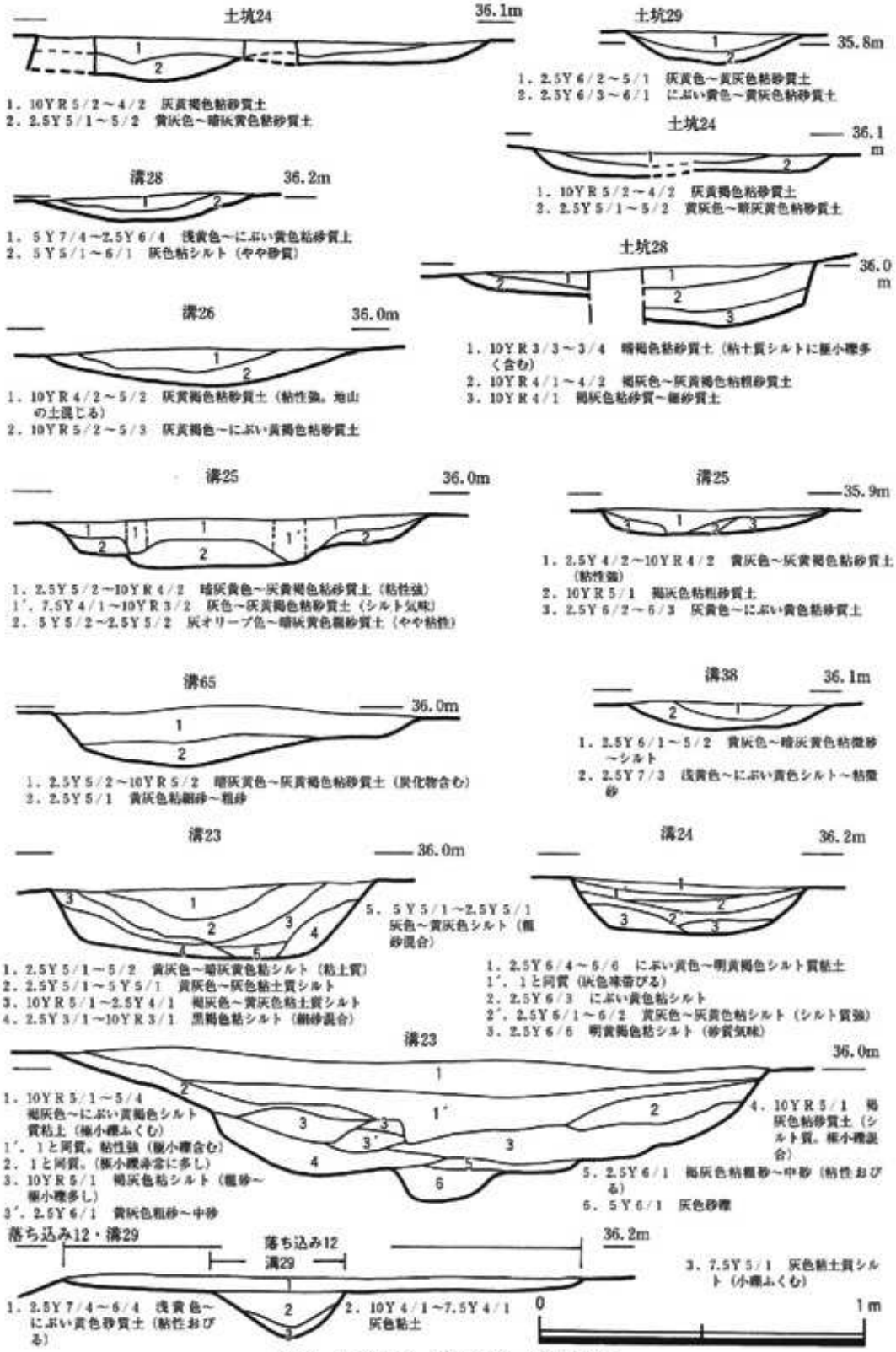


図17　3区土坑、落ち込み、溝断面図

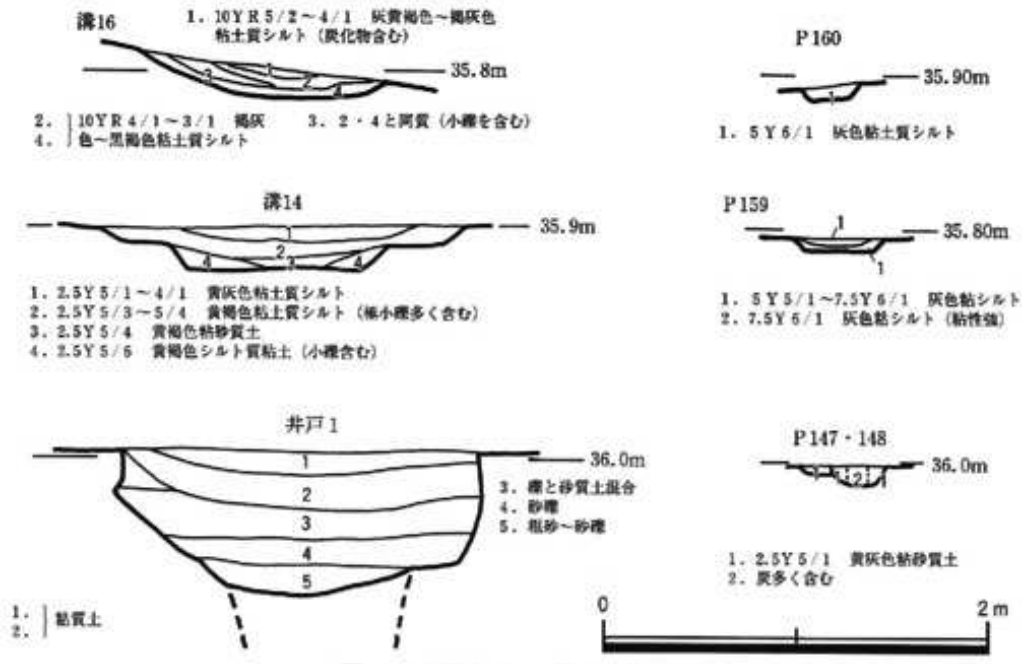


図18　2区ピット、井戸、溝断面図

～粘細砂質土、10YR5/1褐灰色粘土質シルトである。掘り方内は10YR4/1～4/2褐灰色～灰黄褐色粘砂質土、10YR4/1～7.5YR5/1褐灰色粘シルト～粘細砂質土（粘性強、炭化物含む）、10YR4/1褐灰色粘土質シルト（砂質気味）である。ピットと溝23との関係は、埋土から見れば、掘り方内の土と酷似する土が底部から中位に堆積している事から、溝に土が完全に埋まった段階で、ピットが掘られたのではなく、土が堆積していく過程のある時期に掘削されたものと推測される。

他のピットとしては、3区南半部に多く見られる。その中で柱根痕跡を確認したものを挙げると、P278・245・332等がある。溝23と溝24間の箇所にも幾つか並びそうである。

井戸

2区と3区で井戸として明確に認められるのは1基のみである。井戸1は、2区の古墳周溝である溝14（南側溝）を切る形で検出した。井戸は、素掘りの井戸である。井戸の掘削面はT.P.＋36.01～36.04で、上層から掘削されたものである。平面形はほぼ円形を呈し、断面形はやや漏斗状形を呈する。大きさは径が2.2×1.8m、深さは（調査の安全面を考慮して完全に底まで検出していない）0.75m以上を測る。現調査時点の埋土は大きく3層に分けられる。上層より粘質土系、礫と砂質土の混合系、粗砂～礫系である。出土遺物としては、若干ではあるが近世の遺物が認められる。なお東側に隣接するMトレンチにおいても同様な大きさの素掘りの井戸が検出されている。P157は井戸との関係が推測され、撥釣瓶もしくは桔槔と呼ばれる立木の穴かも知れない。ピットの中心と井戸の中心の距離は、1.8～2mを測る。

落ち込み

落ち込みと土坑、また溝との区別は曖昧なところがあるが、埋土と深さによって仮に分けたも

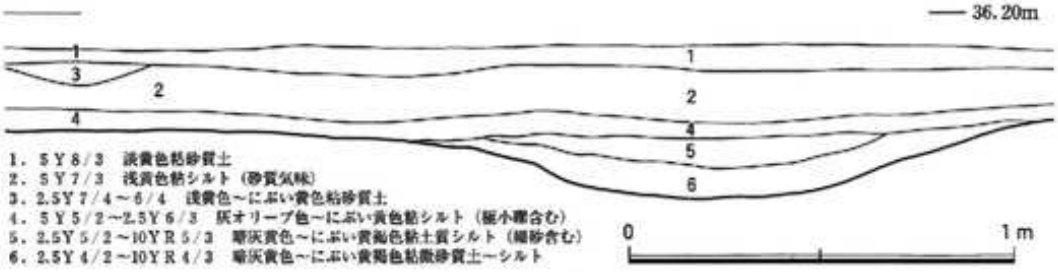


図19　3区溝23土層断面図

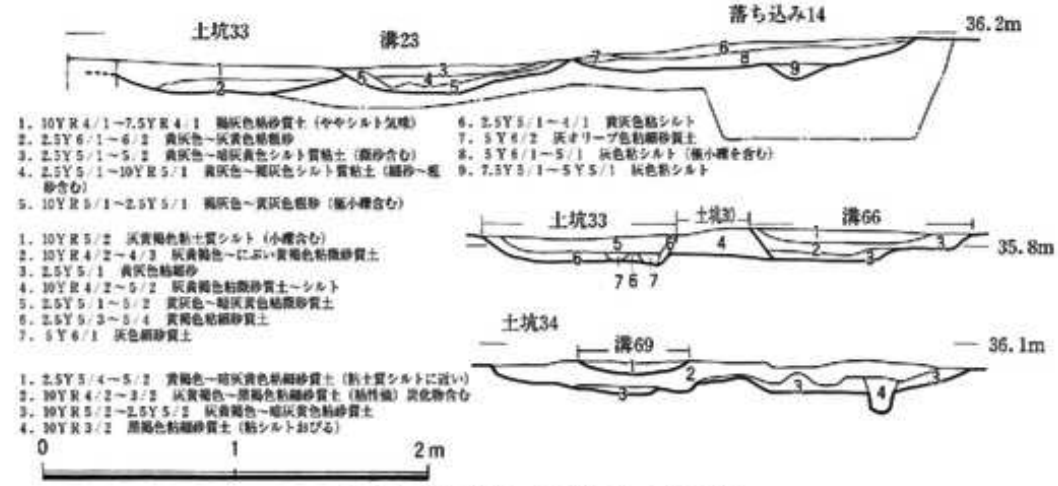


図20　3区土坑、落ち込み、溝断面図

のである。人為的な痕跡が認めれば、土坑の方へ登録した。落ち込みは2区で5基を、3区で66基を数える。出土遺物より落ち込み6～8は、中・近世の時期と考えられる。落ち込み7からは、破片ではあるが土師質の所謂ほうろくが出土している。3区では溝23や、溝28・29に接して位置するのが特徴である。平面形は不整形な楕円形を呈する。落ち込み12の埋土は、溝29が埋まった後に堆積している。落ち込み14と溝23、土坑33では、土坑33が完全に埋まった後に溝23が掘削され、そして溝23の機能が失った後に、落ち込み14の埋土が堆積する。

土坑

土坑は2区で1基、3区で39基数える。土坑と落ち込みの区別が曖昧であった様に、ピット（柱穴）も曖昧であるが、柱根の有無、埋土の状況、大きさによって仮に登録した。溝内で確認したものの中には、登録していないものもある。土坑2は深さ0.3mを測り、埋土は粘土質シルト（粘性強、炭化物を含む）である。土坑3～8は、粘細砂質土や粘砂質土に地山の土がブロック状に混入する。土坑23～28・37は、深さが概ね0.1～0.3mを測る。埋土は粘砂質土や粘粗砂質土である。土坑34では、埋土に炭化物が含まれていた。土坑29は、溝25が埋まった後に掘削された。土坑39も土坑29と同様に掘削されたと推測される。溝14内は古墳と同時期のものと考えられる。

溝

溝は先述した様に、①耕作の痕跡と考えられる人為的な溝、②耕作以外の人為的に掘削された

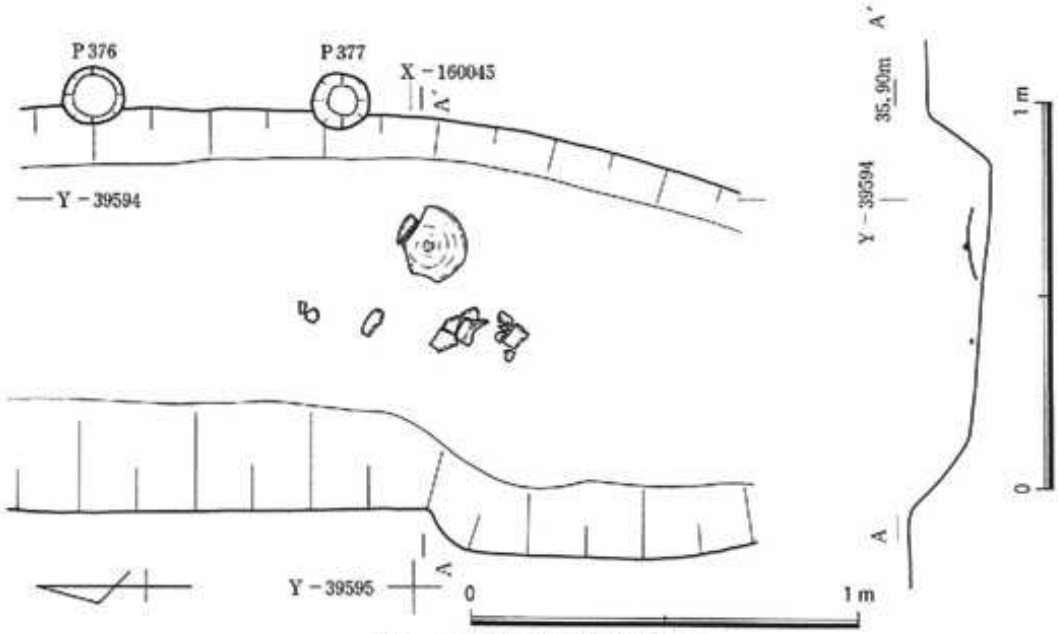


図21　3区溝23遺物出土状況図

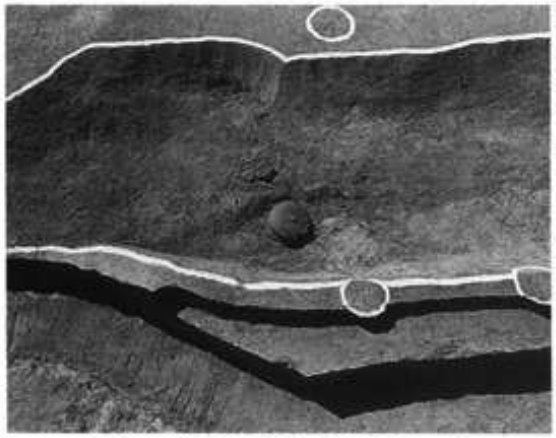


写真25　溝23遺物出土状況（東から）

写真26　須恵器と土師器（東から）

と考えられる溝に分けられ、①は2区の北端や3区の南半部で確認される。②は溝14や、溝23である。溝14は古墳の周溝である。しかし①・②以外に不明瞭な溝が存在する。溝15・溝24・溝25・26・27・28・29・38・61・65等である。

溝23は、3区の南東端で南西方向から北東方向へ流れ、そして南北方向に主軸をおき、断ち割りトレンチの所でやや蛇行するものの、主軸を北西に向けつつ走行し、溝16の方向に延びる。現存長は約29mを測る。溝の肩部幅は0.8～2mを測り、底部幅は0.3～1mを測る。深さは浅い箇所で約0.15mを測り、深い箇所では約0.5mを測る。溝26が隣接する付近では段状に掘削され、底部でさらに幅0.3mの溝が掘削されている。埋土は質、色調で大きく2層に分けられる。上層はシルトか粘シルト、下層はシルト（粗砂混合）か砂質土（極小礫混合）である。色調では10YR系の5/1・3/1・5/4・5/3等を帯びる。出土遺物には須恵器や土師器が認められ、特に

溝25から溝26・65付近にかけて並んだ状態で出土している。須恵器は杯蓋が目立ち、中村編年のⅢ型式3段階からⅣ型式1段階の時期に相当するものと思われる。

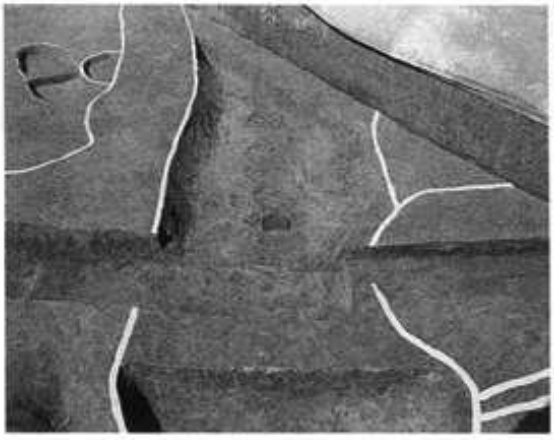


写真27　溝23遺物出土状況（南東から）

写真28　須恵器（北西から）

写真29　溝23遺物出土状況（東から）

写真30　須恵器（西から）

写真31　溝23遺物出土状況（北から）

写真32　須恵器（北から）

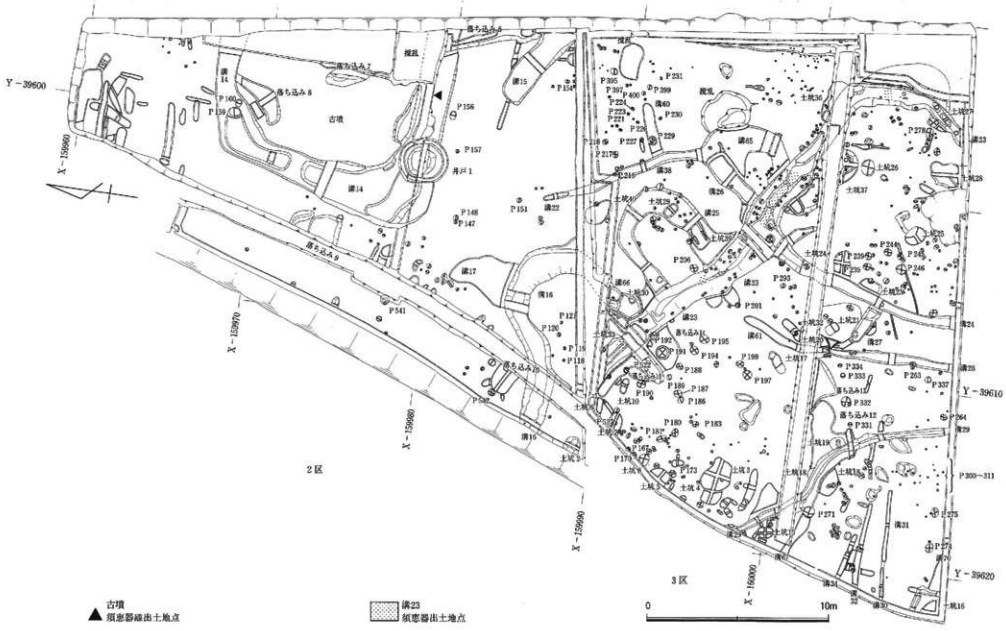


図22　3Mトレンチ（2区・3区）第2面平面図

V．観音寺遺跡の調査成果

1．D地区

（1）10Dトレンチ

遺構面は、北から南に向かって徐々に高くなり、その高低差は約0.8mを測る。調査区の南端の所で人為的に0.4m程下げられている。これは後世に削平されたものと思われ、11Dトレンチの北端部にも同様な痕跡がある。遺構としては、ピット、土坑、落ち込み、溝を検出した。

ピット

ピットは大きく2群に分けられ、落ち込み4から以北と以南である。前者は更に溝19の北側と南側とに位置し、後者も同様に南端部の低い箇所と、それよりも北側に位置する。溝19の北側ではP38～40の3基が存在する。P38・39では柱根痕跡を確認した。ピットの平面形はやや楕円形である。大きさは最大径が0.5～0.65mを測る。柱根径は0.25mを測る。P38～40の柱間距離は1.8mである。P38・39と同等の大きさは、P51・52である。P52はP53～55と直線上に並ぶ。

後者のピット群中には、幾つか並ぶものが存在する。先ず1つはP64・66・70である。いずれも柱根の痕跡を確認している。ピットの大きさは0.2～0.3mを測り、柱根は約0.1mを測る。柱根部分の埋土は、掘り方の埋土より粘性が強いのが特徴である。

他のピットではP85・91・96・104が直線上に並び、主軸を北西－南東方向におく。ピット間の距離は1.7～2mを測る。全長は約5.5mを測る。いずれも柱根の痕跡を確認しているが、

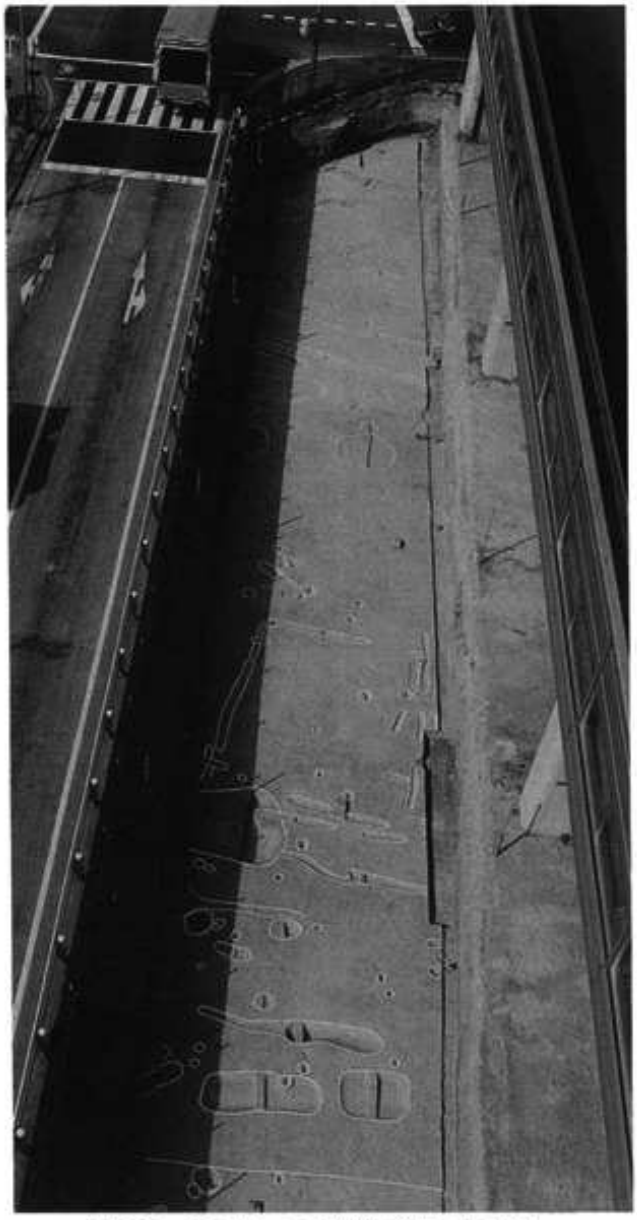


写真33　10Dトレンチ北半部全景（南から）

特にP85の底部では、さらに柱根を据える小穴が掘り窪められていた。大きさは径0.1mを測り、深さは0.06mである。このピットは、深さも他のピットと比較して、0.3mと深いものである。

このP85～104を中心にしてほぼ直角に位置するのが、P98・96・108である。主軸を北東－南西方向におき、ピット間の距離は2.5mで、全長5mを測る。P98・96・108とほぼ同一方向のものはP83・85で、ピット間の距離が2.5mである。

他にP85～104と同一方向のものは、P109・106・108である。全長は5.5mを測る。柱根の痕跡は、P109を除いて総て確認している。

土坑

土坑は1基検出したのみである。土坑は溝51～53の西側に位置し、さらに調査区外へ延びる。平面形は、不整な方形か楕円形を呈するものと思われる。断面形は、ややすり鉢状を呈するものの、南の壁面と底部は丸く、底部の北側で少し段をつけて平坦になり、北側の壁面は平坦で斜め上方にのびる。大きさは、2.3以上×2.3mである。深さは約0.35mで、南側がやや深くなる。埋土には、地山の土が多く混じり、3層に分層される。上層より2.5Y 6/1～6/3黄灰色～にぶい黄色粘シルト（粘土質、地山の土混じる）2.5Y 6/2～7/3灰黄色～浅黄色粘土質シルト（地山の土混じる）、2.5Y～5Y 7/1灰白色シルト（砂質土気味、地山の土混じる）である。

写真34　10Dトレンチ南半部全景（南から）

土坑の時期は、鋤溝によって切られているので、溝より以前である。

落ち込み

落ち込みと登録したものは12基ある。落ち込み1は、溝としての可能性もあるが、とりあえず落ち込みに登録しておく。落ち込みの平面の形状は、円形や方形、また楕円形等を呈している。位置的には、北側の溝が多く存在する付近や、南側のピット付近、さらに南端の一段下がった箇所で見られる。大きさにはばらつきがあるが、深さは約0.04～0.27mを測る。深いものは落ち込み7であ

写真35　10Dトレンチ全景（南から）

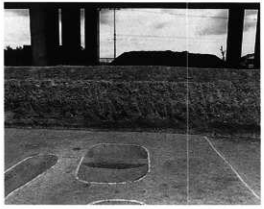


写真36　10Dトレンチ土層断面（西から）

写真37　11Dトレンチ土層断面（西から）

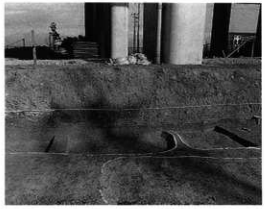


写真38　11Dトレンチ土層断面（西から）

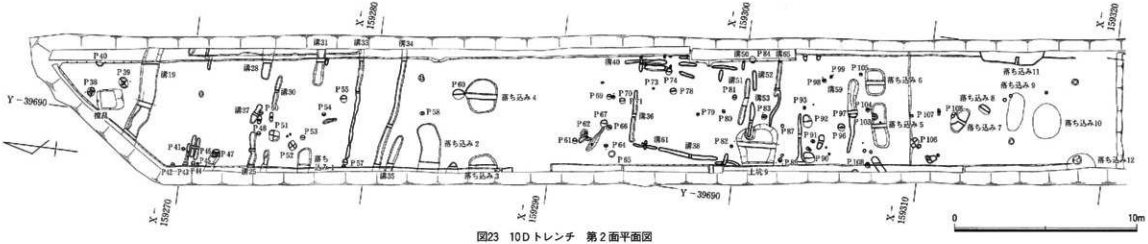


図23　10Dトレンチ　第2面平面図

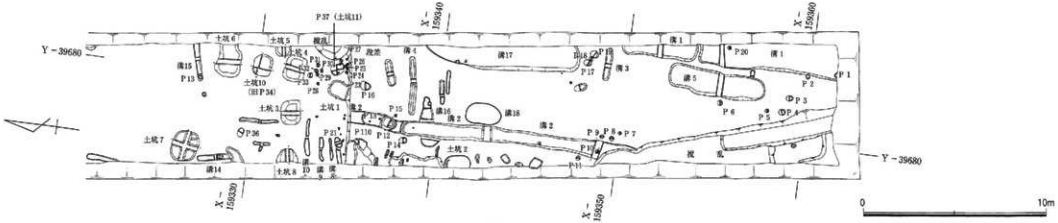


図24　11Dトレンチ第2面平面図

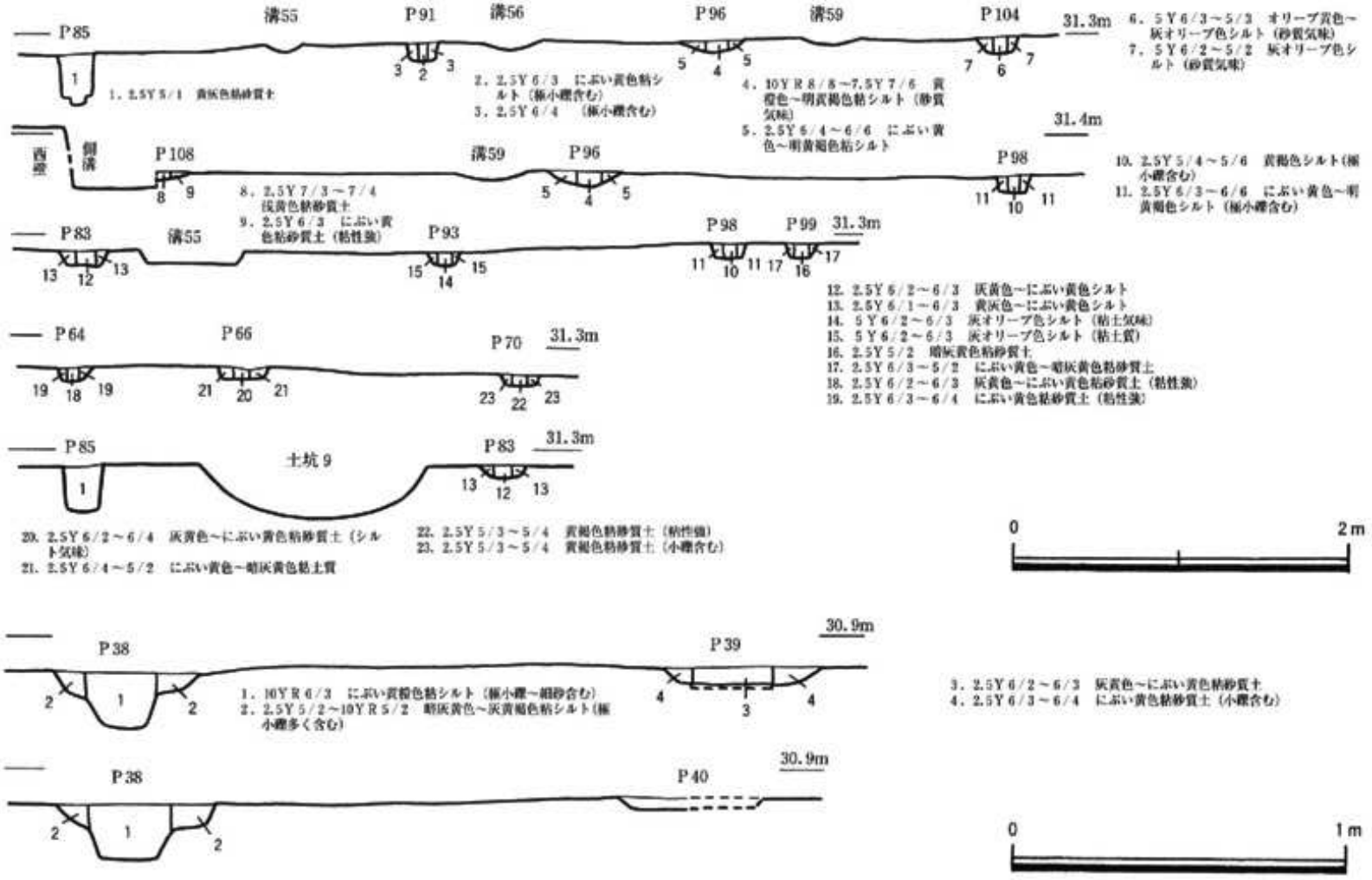


図25　10Dトレンチピット断面図

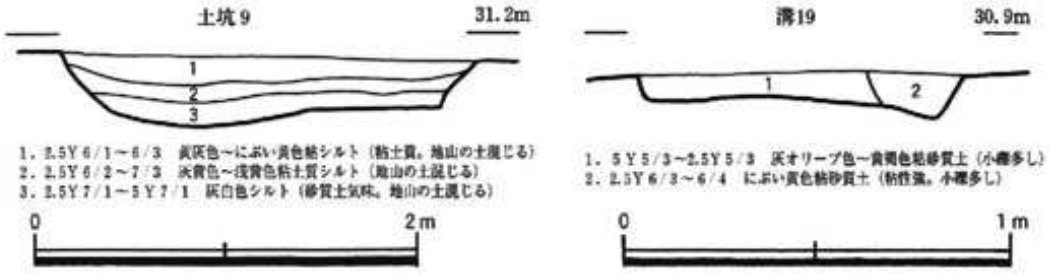


図26　土坑、溝断面図

写真39　土坑９土層断面（東から）

写真40　溝19土層断面（東から）

る。埋土は、北側の溝付近が2.5Ｙ７/１～５Ｙ７/１灰白色、５Ｙ７/１～７/２灰白色、2.5Ｙ７/１～６/１灰白色～黄灰色の粘性を帯びる砂質土である。南側では2.5Ｙ７/１灰白色、2.5Ｙ７/１～７/３灰白色～浅黄色、５Ｙ７/１～７/２灰白色の粘性の砂質土である。埋土の観察から落ち込み７～10は、人為的とは考え難いが、落ち込み11は人為的なものとしての可能性が大きい。

溝

溝は北半部と中央部に位置し、周辺にはピット・落ち込み等の遺構が存在する。溝は耕作痕跡の鋤溝と耕作以外の人為的な溝に分けられる。

溝19は主軸をほぼ東西方向におき、やや蛇行しながら走行する。現存長は５mを測り、調査区外に延びる。幅は0.8～１mを測り、西側がやや狭くなる。深さは0.06～0.1mを測る。溝の底部は平坦である。溝は土が埋まった段階で、北側に再度掘られている。その為か底部は北側でやや下がっている。埋土は５Ｙ５/３～2.5Ｙ５/３灰オリーブ色～黄褐色粘砂質土である。なお本溝は隣接する２・１・３Ｄの溝１・２と同一の遺構と考えられる。

溝33・34は、溝19とは同一方向に主軸をおき、少し蛇行しながら走行する。溝33・34の幅は0.2～0.3mを測り、深さは0.05～0.07mを測る。溝33は11Ｄトレンチと繋がる。

（２）11Ｄトレンチ

遺構面は北側から南側へ徐々に高くなり、Ｘ－15933.5付近で更に一段高くなり、南半部はほ